に銃槍を閃めかせた。

『ウヽオルシ中尉。ラサムが代らう』

奮闘には疲れ、流汗が眼には沁み、稍ふともすれば敵に乘せられんとする旗手は……

『有難う。ラサム。僕は此處を死守して喰止めるから、君は何うぞ軍旗を』

『好矣』

とラサム中尉は、軍旗を奪ふが如く受取ると、部下を勵まして叫んだ。

『オヽ三聯隊の勇士達。生命は取られても軍旗は守護せ。決して我が軍旗を巴里の凱旋門に飾らせるなッ』

『誓つて中尉殿』

と部下は、悲憤の鐵拳を握ぎつて敵に當つた。其の勇敢なる奮闘中ラサム中尉は血路を求めべく、肉迫する敵を防禦して居ると、闘力盡きた旗手ウヽオルシは、波蘭槍騎兵の鞍に引揚げられた。

此の波蘭槍騎兵と云ふのは、佛蘭西の騎兵隊中で有名なるものである。彼騎兵は乘馬術こそ極めて不熟練であるが、胸甲、脊板、兜などゝ云ふ、總て重量ある物は除け至極輕裝である上に、肉迫しての一騎打と來ては、實に巧妙な兵である。

その波蘭槍騎兵が、旗手ウヽオルシの腕をとつて、鞍の前輪に引き寄せた。ラサム中尉は旗手が白い眼球を剝いて、白い齒を噛み鳴らして、殘念さうに捕虜となる苦痛をちらと見たが、それを救ふ事が出來なかつた。

『中尉。軍旗をッ』

と彼が高く叫ぶ聲を聞いて、ラサム中尉は、

『大英國の勇士だッ』

と高く血染めの軍刀を擧げて誓つた。

程もあらせず波蘭槍騎兵の一隊は『軍旗々々』と聲々に呼はつて中尉に逼つて來た。

既に中尉は單身である。

いよ〳〵全力をつくし軍刀を揮つて、縱横に斬りまくつたが、騎乘から稻妻の如く突き來る騎槍のために、身には數創を蒙つた。

でラサム中尉が思はず逡巡すると、佛の歩兵は踏込んで、旗竿を握ぎつた。

『馬鹿ッ』

と中尉は劍で突いて、

『まだ生命はあるぞ。軍旗を汝等に渡すか』

と突擊して惡闘を續けた。だが全く重圍の中であるから、假令中尉が鬼神の勇を奮つても、血路を開く事は覺束ない。

斯くの如き搭闘の中、敵の將校は軍刀を揮つて、軍旗を持つたラサム中尉の右手を斬つた。斬られると共に中尉は、思はず軍旗をバラと落したが、直に軍刀を捨てゝ旗竿を左手で握つた。

さあ斯うなると中尉の身には寸鐵も無い。只旗竿を盲滅法に揮つて、敵の擊退に力むるのみである。悶れ勇敢なる中尉の生命も風前の燈火乎。

この時英國の騎兵隊は、獰猛なる波蘭槍騎兵を、蹴散らして駈け付けた。奮闘に奮闘、馬蹄の響きはアルブエラ近郊の山野に轟いて、砲兵陣地から放火する、巨砲の音響と共に百雷の落つるが

如くであつた。英の騎兵集團を見ると、ラサム中尉は氣が弛だか重傷の痛みに蠢き血を吐きつゝある昏睡中に、軍旗を緊と腹部に隱くして、部下の死骸を枕に永久なる夢路を辿らんとした。

この勇猛なる中尉が、惡闘を重ねたるを知らざる英の步兵旅團は騎兵に續きて疾驅し、全く敗勢を挽回して、頗る猛烈に急進擊を試みた、此の急變化を見ると敗殘せる英の步兵は、重傷を忘れても歡語を擧げずには居られなかつた。がラサム中尉は全く氣絕して彼を訪ふ人がなければ、幾億年の後迄も覺める事はなかつたらう。

頓て我が陣地を進める頃、負傷兵を集めるために、中尉の傍に來たは步兵の一下士官であつた、彼は中尉の傍に來て、軍服の下から喰み出したる軍旗を見ると、恐愕の聲を擧げた。

『あッ軍旗ッ』

と叫んで、前後も考へず取り上ぐると、その途端に中尉は『ウム』と微に息を吐いた。

然し軍曹は軍旗に氣がとられてゐて、ラサム中尉には氣が付かず、血に染まれたる軍旗を取ると同時に、馳せて之を第三聯隊長に呈した。

其後へ來たのは擔架卒と衞生部の下士であつた。ラサム中尉が奮闘の形を以て固く僵れてゐるを見ると、直に應急手當を加へた繃帶がすみ興奮劑が與へられると、ラサム中尉は辛くも蟲の息となつた。

彼は生氣が回復すると、突如叫んだ。

『君。軍旗は……』

『軍旗ですか中尉殿』

『ウム三聯隊の軍旗だ』

『夫は聯隊長の手に還りました』

『さうか有難う』

會話が終ると、中尉は擔架に載せられて、後方面にある野戰病院の假病室に運ばれた。

『下』 中尉の功遂に現はる

或る日のこと。

英國の歩兵第三聯隊の營門へ、佛蘭西から放還されたる此の聯隊の將卒が、ドヤ〳〵と還つて來た。

無論得意らしい態度はないが、捕虜と云ふ境遇から赦免され、

懷かしき我が聯隊の兵營に來たのであるから、溢れる程喜びの色に滿ちてゐた。

『アルブエラで捕虜になつた戰友が歸營した』

と云ふ事が聯隊に知れ亘ると、當時惡戰苦鬪を共にした聯隊の兵は、我先きにと飛び出して來て、軍帽を振つたり高く投げたりして歡語を擧げた。

此の一隊の內に、旗手ウ、オルシもゐた。

彼は將卒に迎へられて營內に入ると、先づ何より聞きたいのは軍旗とラサム中尉とである。

で彼は彼の前に、歡びを述べるために來た老曹長と握手して、

『オイ軍旗は無事だつたさうだナ』

『ハイ旗手殿』

『夫からラサム中尉は』

と云つたが手を振つて、

『さうだ。ラサム中尉では解るまい。ラサム大尉殿は』

『否旗手殿。中尉殿はまだ元の條です』

と氣の毒さうに答へた。

『元の條。フン彼のアルブエラの勇者が昇進を仕無いのだナ』

と旗手は、顏色を變へて額を押へたが、頓て手を擧げて、

『曹長。中尉は何處に居る』

『確か士官室に居るでせう』

『さうか小官は聯隊長よりも彼に先きに逢はなければならぬ』

斯う彼は呟くと同時に廣い營庭を駈けて、高い兵營の廊下から士官室の扉をコツ〳〵と敲いた。

『お願ひだラサム』

『宜しい入り給ひ』

室內からラサム中尉の蠻聲が聞ゆると、旗手ウ、オルシは倒れかゝる樣に入つて、

『ラサム。僕だよ』

『やア君か』

と二人は相抱いたまゝ暫くは古武士の銅像の如く突立つた。

當時を思ふと感慨が胸に滿つ、此の士官達は熱涙を軍服に降らせて肩を搖つた。

暫くするとラサム中尉が、

『オイ待つて呉れ。お互に血の代りに白い奴を降らすやうでは心細いからネ。まあ掛けるさ。ウ、オルシ』

『さうしちやア居られないンだ。僕はまだアルブヱラの報告が殘つて居るンだ』

『彼處の報告か。夫は宜い加減にするが宜いよ。モウ綠草が生へて若芽が萠えて、美くしい野になつて居るだらうからなア』

とラサム中尉は顏を外向けた。之は彼の戰鬪で受けた、顏面の醜い傷痕を、旗手に見せるのが心苦しかつたのである。

すると窓から、兵卒達の歡語を擧げて騷いで居るのが見える。

『まア見給ひ。彼奴等の騷ぎを』

武士道を踏んで、再び軍旗のグの字も云はない、ラサム中尉の雄々しい態度を見ると、ウ、オルシは感嘆の聲を發した。

『あゝラサム』

從容としたラサム中尉が、醜い顏に冷然たる色を浮べると、旗手は、

『では後程』

と云つて室から出た。

其夜歩兵第三聯隊の將校集會所には、歡迎でもない慰勞でも無い、一種の名目もない宴會が、今日歸營したる將校のために開かれた。

殺風景なる兵營に似ざるは、流石に英國將校の集會所である。窓硝子を蔽つた、華美な形の帷幕を除けば、卓上の花瓶に盛つた香の高い花束が、堡壘の如く彼處にも此處にもあるのが外面からでも見えるであらう。

又各所に、輝く電燈の下には、古武士の俤があるとまで言はるゝ、肩の廣い三聯聯の將校達が、金モールの肩章を燦然と光らせて、

男らしい品の宜いスタイルを見せて居る。

既に宴は酣であつた。酒杯を高く擧げてカチ〳〵と言はせる音が、其處此處で響くと旗手ウ、オルシは、椅子から離れてヌツと起つた。

若い旗手が、肅然と起つた殊勝の姿を見ると、列席せる將校は此のアルブエラの勇者のために『靜に〳〵』と小聲で云つた。

旗手ウ、オルシは、最初上長官席に向つて敬禮するために一歩を進め、

『聯隊長幷に大隊長殿。併せて列席せる諸上官殿。同僚諸君。旗手ウ、オルシは茲に暫時の時間を借りて、アルブエラの勇者に就いて、報告せねばならぬ事があります。之は當時の激戰中に、捕虜となつた不面目なる小官が、死を賭しても目下聯隊で編纂中な

る戰史に、是非補修を願ひたい事件であります』

『好矣。遣り給ひ』

と赭顔で頭が禿げかゝつた、故參大隊長が蠻聲をあげて卓を叩くと、列席將校間には盛んなる拍手が起つた。

『最初に小官は時間を與へられた事を感謝致します』

と旗手は、兩眼に白露を輝やかせて、

『アルブエラの戰鬪に於いて、敵の騎兵集團に背面攻擊を受けたる我が第三聯隊は、實に慘澹たるものでありました。殊に軍旗は我が歩兵第三聯隊の王旗は、慘劇の中心となつたのであります。軍旗衞兵は彈雨に散ざれ、騎槍に刺され、惡鬪に惡鬪を重ねたる末。殆んど全滅の姿となつて、遂に軍旗と旗手は大怒濤の如き騎兵集團にまき込まれ、馬蹄に踏まれ銃槍に突かれ、最後の搭鬪

を爲すべく餘儀なくされました。

此場合。彈雨の中を、駈け來つて、小官の手から確實に王旗を受取つて、捧持した我が聯隊の勇者がありました』

旗手は、感慨胸に溢れて、淡き電燈の小影に居るラサム中尉を見ると、中尉は耐へられないやうに、暗涙を呑んで花瓶に隱れた卓上に頭部を埋めた。

『旗手夫は誰ぢや』

と聯隊長は起つて來た。

『ハイ其の勇者は、今晩此處に列席して居らるゝ、中尉ラサムであります』

『ラサム中尉である』

と聯隊長が驚いたやうに彼方を眺めると、列席將校の瞳は、

悉くラサム中尉に注がれた。

『あゝ夫で解つた』

と戰史の編纂主任である老大隊長は、卓上に軀を乘り出した。

斯くの如き戰功がありながらも默して語らず、勤務に忠實なるラサム中尉の武士的動作は、全列席將校から、多大なる同情を受けた。

殊にラサム中尉の中隊長なる某大尉の如きは、我が部下から斯くの如き、理想的英國將校を出すは非常なる名譽であると叫んだ、で將校團は彼に金牌を贈ると云ふ事に決議を纏めて、其夜は宴會の幕を閉ぢた。

集會所から歸るとき。ラサム中尉は旗手の腕を取つて、

『君のお蔭で。顏の傷が光つて來たよ』

と泣いた。

翌日旗手とラサム中尉は、聯隊長に呼出されて當時の苦闘を詳細に聞き取られた。そしてラサム中尉が歸る時、聯隊長は、

『ちつと遲れ馳せだが、本官は君を中隊長にするやうに取計らつて置かうよ』

と云つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

間もなく、ラサム中尉は大尉に進められて、勳章と年金を授與せられた。

夫ばかりでなく、太子ショータ親王に拜謁する光榮を得て、酷く親王からその勇功を稱せられて、特に國手カルフーを招へて大尉の醜面を治療するやうに仰せられた。

一六　歩兵第三聯隊副旗（英佛戰役一八二二年）

旗手戰死するも軍旗を放さず

千八百十一年。西班牙の市府アルブエラの激戰中、英國の歩兵第三聯隊は背後から、敵の騎兵の急襲を受けた。

濠外幾里彈雨の降り頻きる激戰ではあり。殊に他の聯隊は死傷多く、倒れたる戰友を踏み越え踏み越え、進擊すると云ふ非常の場合であつたから、又此聯隊の急襲を援助する暇もなかつた。

同聯隊は、敵の槍騎兵が塵埃を浴びつゝ、大開展を以て急襲し來たるを見ると踏み耐へて火蓋を切つた。

『大英國。大英國』と士氣を勵す絶叫は、將校の口からも兵卒の口

からも出たが、如何にせん、速急の大襲撃であつたから、旭日に照らされる白霜の如く、空しく潰亂する逆境となつた。

此時トマースと云ふ聯隊旗手は、聯隊副旗を以て護衛兵と共に先頭に進んで居つたが、遂に敵の騎兵隊に本隊との聯絡を斷れて、自ら大奮闘をなすべき運命を與へられた。

トマースは全く敵騎に包圍された。如何に勇敢なる英國の軍人でも、此の包圍を破つて出る事は不可能であらうと思つたが、トマースは些とも恐れなかつた。

彼は群集する敵騎中に、突擊を試みて辛くも一方を斬り拔けた、此時トマースの胸中は『神よ願くば大英國の軍旗を保たしめ給ひ』と祈るより外はなかつたのであらう。

トマースは獅子奮迅の勢を以て、圍みを打ち破ると傍らなる森

林に飛込んだ。

之でまづ敵の騎乘を避けたから、また何とか工夫があるだらうと、手早く副旗を腹部に捲き付けて、旗棹を逆手に疾走を始めたが、敵はトマースの走るまゝにはして置かなかつた。

彼の旗手が脫兎の如き姿を見ると、

『軍旗を奪ひ』と叫ぶと共に、ヒラリと騎馬を飛び下つた。この一隊の騎兵は、樹林を縫つてトマースを遂に追詰めた。

『軍旗を渡せ』

『降參をせぬか』

と聲々に叫ぶと、トマースは突立つて、

『馬鹿者。英國の軍人は、死して國家のために盡くす事は知つて居るが、敵に降つて生命を全ふするやうな、馬鹿な卑怯の事は知

らないぞッ』

と怒號して又群がる敵中に飛び込むと、敵はサッと道を開いたが、大勢を頼んで滅多打ちに踏込んで來た。

トマースは奮擊惡闘した。生命のある限りは軍旗は渡さないと百方血路を求めたも衆寡敵せず、遂に蜂の巣の如き創傷を蒙つて憫れアルブエラ近郊の野花と共に斃れた。

そして此の勇敢なる旗手が、生命を捨てゝ守護したる甲斐もなく、聯隊副旗は空しく敵の凱歌と共に翻へつた。

獨逸

一七 モルトケ大將と軍旗

誕辰を祝して軍旗を授く

普佛戰役に於いてメッツ陷落の際、佛國の聯隊には苟も將卒の生存する限りは、軍旗を燒失すべからずと云ふ說があつて、處決を鈍る內不忠漢の爲めに、幾旒かの軍旗は普軍の陣營の手に送られて、中には獨逸皇帝の裝飾用となつた軍旗もあつた。

斯くの如く敵の軍旗を奪つて宮室を裝飾するも、夫は誇るべき一種の紀念であるが、眞實に光榮ある紀念とも云ふべきは、モルトケ將軍の軍旗である。

西歐の英傑モルトケ將軍が、千八百九十年十月第九十四回の誕

辰を祝賀する時、獨逸皇帝は特例を以て、將軍に普佛戰爭以來、常に將軍麾下に從つて奮戰したる、聯隊の軍旗一旒を授與した。

此時獨逸皇帝の賜つた、勅語の大意に曰く、

『軍旗を授與するは實に君主の特權である。

朕は此特權を卿に讓つて、朕が帝位の徽章たる觀兵の軍旗を與ふ。此軍旗は嘗て屢〻卿が、指揮せる軍隊の上に翻つて彈丸雨注の間に屹然たるものであつた。其の紐及び破綻の痕跡に關しては、一種貴重の歴史を有す。是れ殆んど皆卿が手書せる所である卿其れ之を領して紀念と爲せ』

と。モルトケ將軍も此の優渥なる勅語に對つては、恐惶感泣の外は無く有難く拜受して、永久に傳ふべき第一の家寶としたさうである。

佛蘭西

十八　奈翁皇帝と軍旗

旗手ベルニユー血を浴びて殪る

千八百九年四月二十三日、エクミユルの戰爭に佛軍は山を動かす許りの凱歌を擧げた。そして例の三色旗が夕日に輝いて森林と村落との差別もなく、萬歳の聲で波立つと、奈翁皇帝は撫肩を搖つて非常なる喜びであつた。

皇帝は大將ダブーの陣營に臨御して、親ら此大將の肩を輕く敲

いて勅語を賜つたり、ヱクミヱル公爵に封じたりして、非常に滿足の態度を見せた。

夫から皇帝は、濃綠の短上衣を着た、精英なる輕裝騎兵隊だの容貌魁偉な甲兵だの、白衣の龍騎隊だのと云ふ。勇敢なる佛蘭西軍隊を閲兵する事になつて、高い軍帽や眞紅の羽冠が、銃劍のきらめく間に見える隊列を、玉顏うるはしく靜々と通つた。彼の英姿を拜すると部下の兵は、抑へきれない歡びの聲で、此の大陸の大英勇を迎へた。又皇帝は皇帝で老親衞兵などの傍に往くと、『朕の勇者よ』と肩を敲いて見たり。耳朶を捻つて見たりして非常な滿足を表情する例の癖を露した。

斯うするのは皇帝が、士氣を皷舞する方法でもあらうが、此日は殊に滿足であつたから皇帝は黑、青、綠などの肩章を燦かせて

居つた、各兵科の將校などにも幾度となく、溫い言葉や戲言などを聞かせた。

さて皇帝は、閲兵の玉歩を進めて、聯隊旗手のベリニユー中尉の前へ行くと、俄に態度が變つて丁つて、其の耽々たる恐ろしい眼で激しく中尉を睨み付けた。

『中尉。汝の軍旗は何處である ッ』

之は此日中尉が、墺軍の逆襲に逢つて負傷し、其の死護する處の軍旗を、一旦敵に奪はれたが又運よく奪還したと云ふ報告が、皇帝の手元まで來て居つたからである。

中尉は恐惶身の置く處を知らずと云ふ風に顏を擧げて、

『ハイ陛下の軍旗は此所に捧持致します。實は今朝の戰ひ陛下の聯隊は不意の急襲を受け、小官は遂に重傷を蒙つて昏倒したる間

に、捧持する處の軍旗は、一度敵兵に奪ひ取られましたが、幸にも伍長デロールが小官の傍にあつて、最も勇敢に戰ひ遂に奪ひ還す事を得て、再び此處に捧持致しまする』

と奉答すると、皇帝は、

『夫は汝の軍功では無い、中尉デロールの軍功であるぞ』

皇帝が斯う云つたのは、デロールは伍長と云ふ下級武官でありながら、能く奮闘して皇帝と佛蘭西とが名譽とする處の、軍旗を奪還した事であるから、その偉功は正に中尉に價すると云ふの意味である。之と反對に中尉ベルニユーは伍長にも劣る奴だと皇帝に諷された譯であつた。

皇帝の鋭い仰せを聞くと、旗手ベルニユーは滿腔の熱血が湧き沸つて目も眩んだ。何たる恥辱である。佛蘭西の一將校として皇

帝から斯くの如き仰せを賜はつたのは、實に空前の恥辱であると思つて、中尉は軀をブル〳〵と顫はせた。

皇帝は更に語氣荒く、

『汝は負傷したとな。汝は佛蘭西の軍旗を失つたならば寧ろ潔ぎよく處決するが宜い』

皇帝に扈從して居つた多くの將官は、此の仰せを傍から承ると手に汗を握つて、皇帝の軍旗に對する大御心を恐懼すると同時に斯くの如く嚴かなる仰せを蒙むつた、ベルニユー中尉を憫れんだ。

先刻から、此の光景を目擊して居つた、多くの軍隊は靜まり還つて、百雷の轟く如くであつた戰場の夕も、亦寂として更に聲がなかつた。

中尉は數行の熱涙を草叢の上に注いで、

『陛下。小官は必ず死する場所を選びます』

と云つて決心の色を表すと、皇帝は茶褐色の眼に、態と冷かな光りを放つて素氣なく其前をすぎた。

ベルニユー中尉は、皇帝の後姿を拜すると軍旗を抱いて、男泣きに泣いたのは無論のことであつたらう。

皇帝は直に御機嫌が改まつて、幾多の勇敢なる隊列に歡迎されつつ行く間に、囁くやうに大將に云つた。

『大將よ。朕がベルニユーを叱責した事は、情に於いては忍びないが、佛蘭西の爲めには實に已を得ない事であるぞ』

と、又暫く默して進んでから、

『だがベルニユーは明朝。さうだ明朝は大尉になるだらう。まづ朕の考へは誤まらない積りだ。又朕の考が誤つて居るならば、ユ

クミユル公の如き大將を得る筈が無い譯だ』

と大將の肩を敲いて、

『朕は假にも塡人となつて彼と戰ふ事は好まないぞ』

と頻りにベルニユー中尉の豪勇を褒めて居られた。

其の翌日は、拂曉から有名なるラチスボンの戰ひが起つた。例の三色旗は旭に輝いて激戰は數時間に亘つた。奈翁皇帝は血眼になつて、謀略をめぐらす各將軍の陣頭を、さも心地よげに駈け廻つて敵と味方とを熱心に見較べて居つたが、頓て佛軍の大勝に期すると、全軍は皇帝萬歲を唱へて軍帽を高く飛ばした。

然し不運にも皇帝は、敵彈のために足部に輕傷を受けて、一丘地によつて軍醫に治療させた。幕僚の將官はその傍にあつて、諸方から傳令の齎らす報告を集めては一々皇帝に奏上した

皇帝は此間にあつて、ラノヌ大將に追擊の急命を傳へた。大將は全軍を進めて、遂に落日に先立つてラチスボンを陷落させて仕舞つた。皇帝の幕僚は遙にラチスボンの陷落を知つて、城頭高く三色旗が飜へつた壯景を眺めると、皇帝の幕營を目掛けてラチスボンの城門から、馬を疾風の如く走らせて來る一騎があつた。

彼は軍鞭を揚げ、勝ち誇つたる味方の軍をついた。其の輕快に塵埃を蹴立てゝ走らせるさまを見ると、丘上に集つた幕僚は彼は何人であるだらうと、片唾を飲んで待ち構へた。あゝ之れぞ誰あらう、前の日皇帝の叱責を受けた、中尉ベルニューである。

中尉は皇帝の御前近く來ると、馬からヒラリと下りて彈痕のある塡軍の軍旗を力に、蹌踉と皇帝の前に立つて敬禮した。幕僚は中尉が鮮血を淋漓とした生色もない顏色を見た。中尉は、『陛下

御最愛の鷲章旗は只今ラチスボンの都門に翻へりました』とラチスボンを指差し、

『又此軍旗は、小官が敵軍中に鬪奪致したるもの。希くば陛下よ陛下の大御心を以て御嘉納あらせられん事を』

と斯う奏上すると、皇帝は滿面に悅びの色を溢らせて、中尉の奏上を、一々默頭いて聞かれて居つたが、頓ては勇敢なる彼の姿を見て暗涙を催された。

『あゝ卿は重傷を負ふたな』

と大層優しく仰せられた。中尉は皇帝から斯くの如き優遇を受けるは死して餘榮ある事と思つた。

『ハイ陛下　今日小官は死の光榮を見ました』

莞爾として勇敢なる中尉は、奈翁皇帝の前に斃れた。

この光景を見たる奈翁皇帝は、暫くは悄然と腕を拱いたまゝ居つたが、頓て參謀長のベルチエーを顧みた。

『あゝ好士官は遂に此の忠勇なる最期を遂げた。軍旗の爲め國家の爲め惜しい事であるぞ。

卿は今から一條の弔文を作つて彼の父に贈つてくれ、朕が手筐の中から千二百フランの賞金を出して、之も勳章と共に贈つて貰はう。夫から彼は今日大尉に任せるであらう。

朕は斯う云ふ物を、生前この士官に帶せなかつたのが殘念であつた』

と皇帝は眤と眼を閉ぢて、暫時は沈默に耽つたが、又中尉の冷いたる手を握つて、

『あゝ朕は斯う云ふ勇壯の好士官と共に、全世界を蹂躙する事を

得たなら實に滿足であつたらうぞ』

と幕僚に仰せあつた。各將校も密に暗涙を結んで、死後の光榮ある中尉の死骸に向つて默禱を續けた。

此時佛蘭西軍の凱歌の譜は戰場に響き渡つて、中尉の忠勇なる魂は、遙に天國に召された事であらう。

あゝラチスボン郊外の暮色、漸く逼り來つた頃、佛蘭西全軍の模範となつた中尉の死骸は、全軍の將士が贈りたる野末の花束を枕に快く永遠に眠むつたのである。

一九　オフセロー將軍と軍旗

汝等はロジー橋の勝利者であるぞ

千七百九十六年伊太利不朽の戰役の時。佛蘭西の將軍オフセローは、アルコール橋を奪略する目的を以て軍を進めた。

處が墺太利軍は、橋の前を固守して動かない、高地一帶にある樹林には、墺の砲兵が砲列を敷いて、鷲章の三色旗を睥睨して彈雨を降らせ。又歩兵は歩兵で、前面の陳地を占領して、伊太利半島に輝く日光に劍影を閃めかせて、頻りに十字火を浴せた。

その防禦の猛烈なるには、大陸の猛鷙と呼ばれたる佛蘭西の軍隊も、流石顏も振らず進擊して、橋上を占領しやうと云ふ勇氣のあるものもなかつた。

この光景を見ると、奈翁皇帝の忠臣たるオフセロー將軍は馬上に起つて、

『旗手』

と聲高く呼はつた。

將軍の鋭い聲に應じて、突擊聯隊の旗手は軍旗を捧持して直に馳せ付けた。

『閣下』

『軍旗は司令官が捧持するぞ』

と云つて、馬上から旗手の捧ぐる軍旗を取ると共に、拍車を强く馬腹に加へた。

『汝等よ。名譽ある佛蘭西の軍旗は今橋上に翻へるであらう』

憤激の餘り將軍は、雨霰と降る砲彈を浴びつゝ親ら橋頭に進擊すると、佛蘭西軍は漸く生色を發して、

『ソレ將軍に續け。軍旗を保護せ』

と聲々に云つて、猛然として進擊したが、此の光景を見たる墺

軍は一層急射撃を加へたから、佛蘭西兵は一歩進んでは伏し、二歩進んでは膝行する悲境に陥り、遂に前後の聯絡を斷れて、軍旗と將軍は憫れ彈雨中に孤立するの已むなきに至つた。

勿論このアルコール橋を、占領すると仕無いとは、全く兩軍の勝敗に關する事であるから、お互に死力を盡くして兵を集注させたのである。

剛膽なるオフセロー將軍の此孤闘を望見すると、愛馬に鞭打つて全軍を睥睨しつゝ疾驅して、後岸なる橋頭の彈雨中に立つた勇將があつた。

彼は全身をかすめつゝ注ぐ彈雨の間に、平然として馬頭を高く立てた。そして烱々たる眼光で、全軍を一睨にする英姿は誰あらう、之ぞ奈翁皇帝である。

皇帝は、逡巡する突擊聯隊を睨らむと、

『汝等はロジー橋の勝利者であるぞ。勇を鼓して進めよ』

と高聲で怒號した。

皇帝の、大怒號を聞くと等しく、聯隊は恥辱を受けたる如く感激して、銃口を擧げた。

『將軍に扈從せよ』

『敵陣に突貫を誓ひ』

と聲々に呼はつて猛進する間に、皇帝親らも彈雨の間を潛つてオフセロー將軍の傍まで進んだ。

其處で皇帝は、猛然と奮闘しつゝある將軍の手から、軍旗を執つて親ら先頭に立つて猛進した。奈翁皇帝の急進擊を見ると、幕僚の諸將は云ふまでもなく、先登部隊も又勇躍して進擊した。

此時將官ラーヌは皇帝と軍旗を掩護するため、其の前に立つて頻りに指揮を取つて居つたが、敵の集注する銃彈に二個所射られた。夫でも將官は屈せず進むと、又一彈が飛來つて傷つけた。愈愈皇帝の身邊が、危險狀態に迫つて來ると、幕僚ムイヨンは身を挺して皇帝を掩つたが、彼の忠臣は遂に敵彈のために斃されてしまつた。

此の激戰中、佛蘭西の突擊聯隊は、將に前岸に達しやうとしたが、墺軍の砲火が激烈なるため、後續聯隊は續く能はず、隊は彈雨のために中央から兩斷せられて了つた。

斯くの如く、奮鬪に奮鬪を重ねたが、突擊は些とも功を奏さない、佛軍は涙を呑んで退却する事になつた。然るに皇帝は泰山の如く些とも動かず、その陣地を固守して頻りに士氣を勵まし、軍

旗を砲煙の内に翻然と樹立させてゐた。

皇帝とオフセロー將軍は、此の不利なる陣地に叱咤の聲を擧げて七十二時間激戰を續けた後、墺軍を全く前岸から退却せしめて確實にアルコール橋を占領し、靜にその橋上に馬頭を立てた。

即ち奈翁皇帝は、此の偉功ある軍旗の下で、オフセロー將軍に握手を與へて、全軍の武勇を親しく稱揚したのである。

又此の捷報が、佛蘭西政府に至ると、政府は直に閣議を開いて決議せる結果。その軍旗を皇帝並にオフセロー將軍に贈つて、永久に此役の紀念の寶物と爲さしめて、其旨は佛蘭西全國に布告したと云ふ事である。

二〇 歩兵第二十一聯隊旗

勇兵懸崖を飛んで軍旗を救ふ

千七百九十六年六月十日の伊太利の戰ひでは、奈翁皇帝の指揮する佛蘭西軍が、甚だ不利の位置になつた。

剛膽なる皇帝が、彼の軍帽を、砲煙の間に打ち振つて指揮する甲斐もなく、全軍は退却すると云ふの悲運に向つた。

殊に歩兵第二十一聯隊は、惡戰多時に亘つて大隊の全滅を見た。

勿論當時の佛蘭西の軍隊には、後を振り還つて奈翁の理ろしい眼光を浴びる者は一人もなかつた。奈翁の眼光を浴びるよりは、寧ろ敵彈を浴びろと云ふ勢で、頻り奮闘を經續して見たものゝ。有利なる高地から飛來する敵彈を猛烈に浴びて、次第〳〵に河流を控へたる懸崖上の死角まで退却した。之を見ると敵は猶豫も與へず、突擊し來つて散兵線を布いて肉迫した。

此時この聯隊では既に聯隊長は戰死する、各大隊長も斃れると云ふ光景であつたから、今は生存將校が殘兵を收めて指揮をとつた。斃れたる戰友の彈盒をとつて、奮闘を續けたのも此時であれば、氣息絶えんとする兵卒が、自ら彈盒をとつて、戰友を勵ましたのも此時である。敵兵が一歩を進める毎に、聯隊は一人の兵を失つた。死角は遂に崩されて最後の大吶喊となつて來た。

此時佛蘭西の軍旗は、既に旗手の手から離れて、次ぎから次ぎと渡つて居つたが、敵兵は硝煙の間に飜へる軍旗を望むと、

『ソレ軍旗を奪ひ』と叫んだ。

群がる敵兵は『敵の軍旗』と云ふ聲を聞くと共に、小丘を目掛けて無二無三に馳せ寄つて、名譽ある軍旗は、將に掠奪されんとする境となつた。兵卒マルサックは、此時まで一創も負はず、獰猛に敵兵を惱まして居つたが、既に軍旗が奪はれやうとする光景を見ると、一目散に駈け付けた。

『軍旗はマルサックが預つた』斯う叫ぶと共に、旗手の將に奪はれやうとする軍旗をとつて、銃劍を振り翳した。

『金輪際。貴樣達の手に渡すものかッ』

と叫んで、縱横無盡に突擊して、一方に血路を開かうと試みた。

之と同時に、聯隊の殘部小隊も、マルサックの奮鬪に勵まされて、殊死して軍旗を守護しやうと奮戰に奮戰を力めたから、遂に相肉迫して搏鬪する事となつた。

マルサックは、敵が射擊する機を失つた事を知ると同時に、追ひ迫まる敵を蹴散して、きつと丘上に突立つて活路は何處にあるかと見廻した。

後を望めば千仞の懸崖である。其の巖脚を洗ふ河流は怒號を發して、白龍の躍る如く日光に輝いて居る。

前を望めば雲霞の敵。後はこの河流である。モウ何れにしても死より策はないと思ふと、マルサックは手早く軍旗をとつて、腹にグル〳〵と捲き付けた。

彼は、猛然として味方を振り還ると、既に搏鬪は終つて敵兵は

凄まじき勢で追つて來た。彼は死出の名殘りに敵兵に一泡吹かせばやと待ち構へた。敵兵が聲を合せて群がり來るのを見ると、軍旗の旗竿を振り廻はして追ひ退けて置いて、其のまゝ『神よ』と空に十字を切つて懸崖に飛躍した。

マルサックは絶壁の如き懸崖の底に墜落すると、神の助けを得たものか、叢生する雜草の上に落ち轉び、更に餘勢で轉々して水泡繁き巖汀の或る處で止まつた。

彼はあッとさけぶと我に還つたが、最後の勇氣を奮つて前後も顧みず、ザンブと逆捲く波に飛び込んで、流勢に逆らはず辛くも後岸に泳ぎ着いた。

マルサックは、後岸の清らかなる砂上に、疲れたる軀を自ら引き摺り上げて、晴れ渡つたる高い大空を仰いたが、然し起ちあが

る事は出來なかつた。勇敢なる彼は不幸にも墜落の際右足を挫いたのである。彼は幾度か勇氣を奮ひ起しては起たうと試みたが悲しいかなそれは徒勞であつた。彼は痛々しくも蠢めいて空しく砂上を轉び廻つて居つたが、遥に此の樣子を見て、其處へ馳せ來つたのは豫備隊の一兵卒であつた。彼はその兵卒の肩によつて司令官の前に行つた。

斯くして濡れたる、歩兵第二十一聯隊の軍旗は、勇敢なるマルサックの手から司令官に捧げられたのである。此時同聯隊は殆んど全滅であつて、一人マルサックが軍旗と共に辛くも危難を免れたと云ふは空前の話で、皇帝は深く彼の驍勇を嗟嘆せられたと云ふ事である。

二一　敵六旒の軍旗

軍旗は奪はれぬが名譽

奈翁皇帝が軍旗を尊重する事は、他國の將軍に比較すると、實に一頭地を拔いて居つたやうである。即ち鷲章の軍旗は、二十ケ年間全歐洲に實地講義をした、とまで謂るゝ奈翁皇帝の戰術の神髓であつたかも知れない。

これも奈翁皇帝が軍旗に對する一の美談である。

西暦千八百五年十二月二日、オーステリックの戰ひが終つて、佛蘭西の全軍は壯嚴なる觀兵式を行ふ事になつた。昨日まで十字火で飾つた陣地は、今日砲煙が霽れて鷲章旗は、地上高く翻つて

偉風堂々たるものであつた。

小さき八（皇帝の事）は、白のカシメーア織の軍袴を穿いて、雙手を背後に靠せて、馬上裕かに閲兵をすることになつた。例の如く佛蘭西兵は、皇帝の英姿を拜すると狂喜する如くに、軍帽を打ち振つた。斯の如き英勇の麾下となつて戰鬪すると云ふことは實に彼等にとつて名譽でもあり、且光榮でもあつた。

皇帝。皇帝と云ふ聲が、全軍に響き渡ると、各聯隊では、出來るだけ壯嚴にその英姿を迎へて、旗手は聯隊毎に陣頭に立つて、幾多の兵勇を犧牲に拂つた高價なる軍旗の最敬禮を行つた。

皇帝はこの光景を見ると、何時もの冷かなる茶褐色の瞳一杯に溫かい喜びの色を溢らせて、滿足氣に答禮しつゝ拍車も輕く行きすぎたが、頓てS聯隊の陣頭に來懸ると、サッと顏色を變らせら

れた。

『聯隊長ッ』

『ハッ』と老大佐は蒼白の顔をあげて皇帝の馬前に立つた。

『汝が聯隊の軍旗は如何にしたぞ』

『ハッ本日の戰ひで……』

と聯隊長は皇帝を見上ぐる勇氣もなく言ひ澁つた。

皇帝は馬上高く聲を勵まして、

『汝等は朕が授與したる軍旗を失つたな』

老大佐の聯隊は不面目此上もなかつたから、肅として聲を呑んだ。

聯隊長は皇帝の叱咤を浴びると、更に一歩進んで、

『陛下お言辭を返すは恐惶の次第でありますが、然し敵、露墺の

軍旗六旒も、また小官の聯隊で鬪奪致しました』

と答ふると、旗手は謹んで血にまみれた、敵の六旒の軍旗を捧呈した。聯隊長は皇帝の氣色如何と見て居ると、皇帝は鋭い眼を聯隊に浴せて、

『汝等は敢へて怯懦と云ふ譯では無い。然し敵の軍旗を奪ふよりも、我が名譽ある軍旗を奪はれない方が名譽であるぞ。

假令敵の軍旗六旒を奪つても、我が一旒の軍旗には變へられないぞ……』

と高らかに叫んで聯隊を睥睨せるまゝ、不快の色を以て行きすぎた。

聯隊長と聯隊の兵卒は、この六旒の軍旗を眺めて暫らく茫然として居つたが、頓て明日起るべき戰爭には、全聯隊の死力を盡く

して、今日の恥辱を雪がうと誓つた。

これは皇帝が軍旗を以て軍隊の生命とし、且つ國家の表章とするに重きを置いた例である。

二二 輕歩兵第一聯隊旗

彼の猛將を討つ勿れ

千八百十五年六月十八日の、ワートルローの激戰は、英佛戰爭中最も有名なるものである。

これは奈翁皇帝と、英國の名將ウエリントン公との顏合せで云はゞ英佛の關ヶ原、何れも歐洲の覇王たらんとする大戰爭で兩軍共に全力を集注した戰爭であつた。

で此の戰爭は英國軍が勝つた。歐洲大陸の名優は、スコットランドから來た花形役者に追ひまくられた。故に彼皇帝は勇敢なる我が部下の耳を引ッ張つて、御機嫌のよい顏を見せる處でなく、幕僚と共に沈思の狀態となつた。二十年來、敎へ來つた彼の戰術は、先づ英のウエリントン將軍によつて、立派に答案を提出せられた譯である。彼は雄々しい生徒の戰鬪振りを見て、必ずや額に皺を寄せて苦笑せられたる事であらう。

此時の敗軍に於て、佛蘭西の輕歩兵第一聯隊は、兵を收めて退却する暇がなかつた。此の聯隊は白衣の龍騎隊や、熊の皮の飾鞍に跨つて居る騎兵や、甲兵や、槍兵に遲れて我れ勝に退却した。

斯う云ふ狼狽の仕態は、先づ皇帝の軍隊が編制されてから恐らくは空前の事であつたらう。高い軍帽や赤い羽冠までが、入り亂

れて騒擾する光景を、硝煙彈雨の間から見ると實に壯觀なものであつた。

すると何う云ふ譯であつたか、孤り旗手が遲れて十字火の下に度々跪かうとした。軍旗衞兵も又如何ともする事が出來ず、急射擊の内に四散すると云ふ境遇になつた。

旗手は大膽であつた。尙ほ高く竿を樹てゝ、退却の歩を緩めると、一彈は飛來つて彼の背後から致命傷を與へたので、旗手は、

『佛蘭西』

と絶叫し、そして揑と斃れた。

これと同時に軍旗も地上に倒れたから、聯隊長は奮然として乘馬を捨てた。

『軍旗を失ふ事は出來ぬぞ』

と叫ぶと共に、剛勇にも再ひ十字火の下を潛り戻つて、單身軍旗の傍に驅け付けた。

英國の追擊隊は佛蘭西の軍旗の倒れたるを見ると、疾走し來つて奪はんと企てたが、聯隊長は之と力戰したる後、辛くも軍旗を捧持して退ぞかうとした。

聯隊長の勇敢なる動作を見ると、英の歩兵は盛に追擊して霰の如く銃彈を浴びせたから、聯隊長は軍旗を抱いたまゝ、殘兵を集むる暇もない。僅に危急を見て馳せ來つた、二三の軍旗衞兵に護備せられて退却しやうとしたが、是等の兵きへ遂に斃れて、今は單身退却を決行するより他に策はなかつた。

この勇猛なる佛國將校の光景を見ると、英の一將軍は鐙を踏んで高く叫んだ。

『汝等は彼の猛將を討つ勿れッ』

追擊兵はこの命令によつて敵なる聯隊長の危機を救つた。

これが爲めに輕步兵第一聯隊旗は、聯隊長に捧持されて、無事に安全なる地點に翻へる事が出來た。英の一將軍が斯くの如く叫んで、敵の聯隊長を救つたのは、聯隊長が軍旗に忠勇なるを感ずると同時に、彼の部下が戰鬪力の既に盡きたるを、衆兵で討つことは義に非らずと云ふ、英國的の武士道からである。

英の一將軍と佛の一聯隊長。此の文明的の對照を見ると、日本魂は我國特有の武士道とのみ誇る事は出來無い。

二三　擲彈兵第三十三聯隊旗

敵を欺いて軍旗を奪還す

白楊の濃綠りに茂つて居る、メレニヤノー村の夜は殺氣に滿ちて居つた。

夫は佛の擲彈兵第三十三聯隊が星斑らなる宵の程、此村に到着して村落露營に就いたからである。斯う云ふ事は當時の此の附近の村落には屢〻ある事で、星浮かぶ村の小川で鍬を洗つた農夫は、此處彼處に警戒して居た哨兵の姿を見ると、不安の念に胸を震はせながらも家路をさした。が意外に村は物靜かで、隊は街道上にある哨兵の外は、何れも豚小屋にも等しい農夫小屋に入つて、背嚢を枕に足を長々と伸ばさうとしたが、その遑もなく警報は第二大隊の哨兵から傳へられた。

その報告によると、敵の英國軍は枚を啣んで、大擧隣村まで來て居る形勢であるから、此の夜半大夜襲があるに違ひないと云ふ報告だ。此時聯隊旗手のベルトラン中尉は、第二大隊が夫々配備についた後で、軍旗の危機に迫つた事を感じた。

即ち、軍旗衞兵に守護を命ずると共に、自分は村内の一隅に露營して居る、第三大隊に急を告げて、護衞兵の派遣を乞はうと云ふ目的から、疾走して行つて其大隊本部の扉を敲いた。此時第三大隊も夜間斥候から、大夜襲があると云ふ報告を受けて、防備に力を盡くして居つた。

然し大隊副官は、ベルトラン中尉の依賴を聞くと、直に大隊長に取次いで、若干の軍旗衞兵を送る事にした。

旗手は、之に幾分か胸を休めて歸つて來ると、第二大隊は既に

敵と放火を交へて、村落には敵軍が汐の如く攻め寄せてゐた。彼はその間を脫兎の如く飛んで來て、軍旗の傍によつたが、軍旗は既に衞兵に護衞せられて奮鬪中であつた。

『失敗ッた。遲かつた』

と中尉が叫んで敵陣を突いた時、敵の小銃彈は旗竿を折つたから、軍旗はダラリと地上に落ちた。

中尉は奮然として倒るゝ如く走つて之を拾ふと、幾人の衞兵を斃した敵兵は駈けて來つて、旗手を起しもやらず、後から銃槍でグイと突いた。

それでも旗手は屈しなかつた。軍旗を雙手で搔い込んで腹這ひになると、敵兵は容赦もなく銃槍で、彼の頭部を亂擊して止まなかつた、旗手は血汐の飛吹く間に、軍旗を抱いた儘絕命して仕舞

つた。

全く絶命せる旗手を見ると、敵兵は折重なつて軍旗を奪つた。

さて我が聯隊の軍旗を奪はれたと云ふ事を聞いて、奮然と猛り立つたのは伍長トルコーモである。

彼は戰鬪中であつたが、敵を捨てゝベルトラン中尉の死骸の傍に走り付いて、悲慘なる旗手を搔い抱いた。

『中尉殿。軍旗は譬つてトルコーモが奪ひ還します』

と呼べど魂還らざる中尉の死骸の上に、熱涙をハラ〳〵と降らせた。で彼は荒れたる獅子の如く、敵陣に突入すると、暗夜を幸ひに忽ち一人を打ち倒して、軍帽と上衣を剝ぎとつて、そして手早く我が軍服と着替へ、再び軍旗を求めて深く敵陣に入つた。

敵兵は彼の猛者を見咎める暇もなく、深く入るまゝに任せて居つた。

トルコーモは、此處彼處と眼をくばつて駈けめぐると、我が聯隊の軍旗は、一團の敵兵に護衞せられて、農夫小屋の傍にあつた。

彼は占めたと思つて、腕を鳴らせて後から忍び寄つた。躊躇ふまでもなく突然飛び掛つて奪ひ取つた。

『佛蘭西の軍旗は僕に渡せッ』

と、彼は不完全なる英國語で叫んで、大膽なる働きをしたが敵兵は佛蘭西の伍長トルコーモと思う筈がない、只戰友の一人と思つて。

『馬鹿を云ふな。僕の手で捕つたのだ』

『何を云ふのだ僕が持つのだ』と彼は蠻勇を振つて、軍旗を奪ひ還すや一目散に飛び出した。

敵兵は最初は、味方の悪戯と思つて居つたが、トルコーモの馳せ去る姿を見ると、漸く氣が付いて後を追つた、が伍長は懸命である。佛蘭西のために生命を捨てる覺悟で、後も振り向かず軍旗を抱いたまゝ、銃彈の間を掻いくゞつて佛蘭西の軍に投じた。

其時夜は全く明けて、敵兵も遠く村落を去つたが、第三十三聯隊も又殿兵を收めた。曉風冷かに陣頭吹いて、硝煙僅に東天にのこれる時、中尉ベルトランの死骸は一農家の庭に運ばれた。伍長トルコーモは疲勞せる色もなく、軍旗を捧持して彼の上を掩つた。

全軍肅として聲なく、軍旗又有情に垂れて、實に壯嚴なる光景を見せたのである。

聯隊長は冷かなる彼の手を握つて曰く、

『中尉よ。軍旗はトルコーモが奪ひ還したぞッ』

二四　歩兵第九十一聯隊旗

胸檣の旗手は幾度か斃る

ソルフェリノーの戰役の時であつた。

佛蘭西の、歩兵第九十一聯隊の第一大隊は、前面にある一附屬堡壘を占領する目的で、聲を密め峻坂を登つて、夫から密集部隊となつて、秋風枯葉を捲くが如き勢で突擊を試みた。

無論攻擊の守則として、一彈も放たず片言も揚げず、只懸命に堡壘を目掛けて突進して來つたが、覆道の前面に到ると、忽ち萬雷の一時に震ひ落ちるかと思ふばかりの響きで、ウラー、ウラー

と吶喊した。

堡壘の胸墻から之を見ると、恰も狂瀾が孤島に激する如くで、日光に輝く軍章は、閃々たる銃劍と相照映して、帽影と劍光とは、飛沫の如き光景であつたが、敵はちつとも恐れないで、盛に急放火を浴びせた。

第一大隊も又放火を開いて、斜堤の全周は硝煙糢糊として空天を覆ひ、兩軍で射擊する彈雨は大霰が降るやうであつた。敵の將校は、胸墻を馳せ廻つて、部下の兵を鼓舞して各所の掩濠から射擊を努めさせたが、佛蘭西兵も斃るゝ前者の屍を躍り越え、躍り越えて猛進した。

しかし胸墻上からの敵の急射擊は、幾度か佛蘭西兵の隊伍を亂させて、稍〻ともすれば退却するの止むなき態を見せたが、其處へ援軍として馳せ付けたるは親衞擲彈兵の一隊であつた。

彼等の一隊は、敵彈をも恐れず猿の如く胸墻まで登つて、猛烈なる射擊を加へたから、敵は遂にその一高臺地を捨て、本壘に退却した。

第一大隊が破竹の勢を以て高臺を占領した頃。第二大隊も敵の猛烈なる射擊を避けて、辛くも續いて高臺に上つた。此時旗手ギースイル少尉は、臺地を確實に占領したと云ふ事を示すために、軍旗を臺の凸角に押し樹てゝ翻すと、之を見たる敵は奮然と逆襲して來たが、佛兵のために蹴破れらて了つた。

第九十一聯隊の目的は、堡壘を占領するにある、即ち軍旗を臺上に翻したまゝ敵兵の掃射を連續して居ると、敵の狙擊兵は旗手ギースイル少尉を擊つて斃した。

旗手は痛手に、思はずも軍旗を捨てゝ倒るゝと、傍に居つた少尉トレーは、

『夫れ。軍旗をッ』

と地上に飛び下つて拾ひあげると共に、又もや臺上に飛び上つて樹てた。

此の時敵軍は是非共、此の高臺を回復しやうと云ふ目的で盛んに放火を浴びせ、襲撃の喇叭を吹奏して、猛烈に射撃を加ふるので、其の彈雨を浴びて又トレー少尉も斃れた。軍旗は再び倒れて、胸檣に落ち行かうとするから、傍らにあつた伍長ブーラキーは、銃を捨てゝ馳せ下つた。

彼は危くも墜落せんとする地點で、軍旗を引き止めて、將に檣上に登らうとする時、敵彈は飛び來つて彼の足部を貫いた。時に

敵の大逆襲は頗る猛烈を極めて、我が軍は稍ゝともすれば崩れやうとする場合であつたから、彼は其負傷の痛みも忘れて、勇敢にも旗竿を衝いて再び臺上に立つと、敵兵の大突擊は既に功を奏して我が兵は四散する運命となつた。

敵は佛蘭西兵が加へた急襲から見ると、尙ほ一層猛烈なる突擊を以て、臺地に躍り入つたから、大隊長ポンジブーは絶叫して敗兵を集め、死力を盡くして戰鬪を經續したが、敵彈は彼の胸部を射たから堪らない。一度此の高臺を占領して、佛蘭西の軍旗を樹立せしめたる大隊長ポンジブーも、空しく凸角上の標的となつて斃れた。

斯くの如く、殆んど聯隊全滅と云ふべき光景であるから、軍旗を棒持したる伍長ブーラキーは、自ら最後の處決を採らなければ

ならなかつた。

彼は百方苦心の末、機智を以て遂に敵兵を欺き、軍旗を携へて萬死に一生を得た。

此の伍長ブーラキーは、後有名なるクリミヤ戰爭に、偉功を奏してレジメンレメールの勇士に封ぜられた。

二五　親衛擲彈兵第一聯隊旗

メッツ開城バザイン將軍降る

千八百七十年七月二十八日、佛帝ナポレオン第三世は、親ら佛軍を統帥して、皇太子及び陸軍大臣レバウフを從へて、メッツの城砦に向つて出發した。

これは普魯西と開戰する爲で普帝も又親ら普軍を率ゐて、八月二日宰相ビスマルク、參謀總長モルトケ將軍及び陸軍大臣ルーンと共に、大本營をマエンスと云ふ處に進めた。

この第一戰では、佛のフロザール將軍が、サールブルーケンに屯營する普軍に砲擊を加へて美事に勝を得たから、巴里の佛國民は、非常に歡喜の聲を擧げて第三世帝の武勇を誇つたが、夫は束の間、八月四日普國皇太子が曉霧を蹴つて、ワイセンブルクを破つて以來。佛軍は到る處の戰ひに敗れて其の大なる防禦線は、メッツ城外まで縮少するの已むなきに至つた。

斯う云ふやうに、連戰連敗の光景であつたから、第三世帝はメッツに僅か許りの軍隊を止め、全軍はシャロンまで退却して、皇帝親らは花の巴里に還幸しやうと云ふ、卑怯なる決心を持つたが、

まさかにさう云ふ事も出來ず、遂にモゼル河の右岸に五軍團の兵を集めたる外、シャロンにはマクマホン將軍を司令官として、四軍團の兵を以て防備させた。

處が、皇帝の敗報を聞いて驚いたのは、巴里に居る佛蘭西國民である。始め彼等は我が軍の勝利を確信して居つたが、此の敗報を頻々と得るに從へ驚惶のあまり、俄に新內閣を組織しバザイン將軍を新元帥としてメッツの指揮官に派遣した。

此事を知つた普軍では、シャロンのマクマホン將軍とメッツのバザイン將軍が、互に聯絡をとつて攻勢をとると大變であると云ふ處から、先づバザイン將軍をメッツに封鎖して置かうと、一軍にはモゼル河岸の佛軍を喰止させめて置いて、全軍はモゼル河を渡つてメッツ城に向つた。

バザイン將軍は始め此事を知らなかつた。そして十四日の拂曉にはシャロンに退却する計畫で、背進を開始すると、突然中途で普軍の爲に要擊されて、再びメッツ城に歸つた。

十六日の朝。バザイン將軍は更に退却準備を整へて運動を起し普軍の攻擊に對ひ、直に陣を敷いて應戰した。此時佛軍の一司令官カレロベー將軍は、普軍の中央部隊を進擊して、縱橫無盡に破つた結果、普軍も一時は敗色になつたが、幸ひにも普軍のアルベンスレベン將軍が騎兵隊を率ゐて來て、勇敢なる佛軍に突入れた處へ、フレデリックチャーレス親王が指揮する援軍迄來たから亦普軍は振つた。此日は殆んど十二時に亘る激戰であつたが、太陽が西山に傾き、メッツ近傍の村落に、寂しげなる燈火が點ずる頃になつて漸く兩軍は陣を收めた。

この時に當つてバザイン將軍は、メッツ城内に軍を收めると、再び敵のために退却通路を斷れると云ふ考へから、メッツ城外に陣取つて左右翼を廣く張つた。

十八日の朝になると、普帝が親ら指揮して佛軍に迫つた。此の目的は何うしても、この一戰爭でバザイン將軍をメッツに封鎖する、と云ふ意氣込で激しい攻擊を加へたが、佛軍の應戰も又手强かつたから、普軍は一度退却する境遇になつた、頓て又死力を奮つて遂に佛軍をメッツに封鎖し、普軍は全く包圍の隊形をとる事となつた。斯くの如く包圍せられたるバザイン將軍は、如何なる手段をとつても此の普軍の重圍を脫出して、シャロンに在るマクマホン將軍と合さうと云ふ計畫から屢〻突擊を試みたが、其結果は何時も不成功に終つた。

其内にセダンは陷落する。佛蘭西の皇帝は廢せられると云ふ佛蘭西の政變を見たるバザイン將軍は、近き内に講和になると云ふことを知つて、夫までは佛蘭西軍隊の名譽を保つために、籠城を繼續する方針で居つたが、城中には次第に糧食が乏しくなり、且つ講和の成立も速かでないと云ふ報告を得たから、遂に意を決して十二月二十七日に包圍普軍の總督たる、フイデリックチャーレス親王の下に降服した。

此時バザイン將軍は、部下の將士十八萬及び大砲千四百餘門と其他の兵器類を悉く普軍に引き渡したが、只一ッ渡さなかつたのは佛蘭西各聯隊の軍旗であつた。

勿論メッツ開城の條文中には『佛國の軍旗は普軍の營に送致すべし』と明記されてあつたが、佛蘭西の守將バザイン將軍は『軍旗は

萬世に有形の大屈辱を殘すものであるから、決して渡すとは出來ない、又部下の將士も必ず敵に送る事を承知せないだらう』

と云ふ決心から開城の前日に、各聯隊に命じて『軍旗は緊と箱に藏めて敵に知れないやうに武庫に送つて燒いて仕舞ひ』と命令した。

此の命令を受けると、ラボークヘー將軍の師團では、各聯隊を整列せしめて、之まで露營にも激戰にも離さなかつた、名譽ある軍旗を隊列の前に樹たしめた、そして師團長は落日の影を追ふて沈痛なる聲で、

『あゝ諸君よ。我々は今日軍旗に別れねばならぬぞ』

と聲を顫はして總司令官の命令を傳へ、親ら軍旗に最後の敬禮を與へると、鬼神も欺かうとする各聯隊の士卒は、滂沱と散る熱涙を拂ひも遣らず、悉く聯隊旗の下に集まつて、悲痛の訣別を告げた。

各旗手も、師團長の命ずる儘、涙ながらに兵器を破つて焚火をなし、喇叭卒をして涙ある最後の喇叭を吹奏せしめたが、まだその吹奏も終らない內に普軍が進軍して來たから、師團長は直に號令を發すると、軍旗は悉く火中に投げ入れられて、たゞ空しくメッツ城頭に登る一片の煙りと消えた。

此時炎の輝きに寫つた各聯隊の將卒の顏色は、無限の悲痛を帶んで、假令巴里中の名畫伯が集つても、其のカンバスに寫生する事が、出來なかつたに違ひない。

又ラバザー少將の旅團では、前記の命令を受け取ると同時に、部下の聯隊長を呼び集めて、バザイン將軍の命令書を示した。

『貴官等の意見は……』と少將が氣色ばんで問ふと

『閣下。燒く許りであります』

と各聯隊長は等しく答へた。

之も軍旗を敵に渡すのは、千萬年の後までも國辱を貽すのであるから、寧ろ燒くと云ふ意見からである。

ラバザー少將が、

『好矣』と絶叫すると、四隣は寂として只暗涙の佩劍にさ走しる音の高きのみ。

夫から各聯隊長は陣營へ歸つて、血涙を呑んで旗手を促した。

軍旗を燒くと云ふ事は、如何に壯絶の事業であるか、百萬の普軍も恐れず吶喊する佛蘭西兵も、全く神氣枯れて、前後もなく互に軍旗を抱いて號叫したさうである。

此時ラバザー少將は、師團長へ左の如き報告をした。

『我部下なる各聯隊は、軍旗を敵手に委して、國辱を萬世に貽すを遺憾とし、一同軍旗に對し愛惜の血涙を呑み、而して之を燒亡せり。其の悲哀痛憤の狀況は筆紙に盡くし難しといへども、詳細に之を掌簿に記し置きたり』

親衛擲彈兵第一聯隊では、バザイン將軍の命令を訊くと、士卒は陣頭に集まつて頗る動搖した。

多くの戰友を殺し、その尊重すべき血で守護して來た軍旗が、今や敵の軍營に渡されると云ふ事であるから、士卒は悉く軍旗の下に集まつて怒號を極めた。

『佛蘭西ッ』『軍旗ッ』と云ふ聲は、群集の耳から耳へ大怒濤の猛ける如く響いて、地團駄を踏んで叫ぶ兵もあれば、長く亂れた髪を掴んで口惜しがる兵もあつた。

『我々は軍旗と共に斃れるッ』

『さうだ。戰友、軍旗の下で最後の奮闘を繼續せよ。』

と口笛を鳴らす地を踏む、そして互に悲憤の涙に暮れて居つた。

其處へ來たのは聯隊長のペアンである。彼は戰場に於いては『鐵の鉾』とまで言はれた猛者であつたが、今は露營に宿る白露の如き悲涙を結んで、士卒の群集する間に突立つた。

『汝等の心は能く解つた。聯隊長は佛蘭西國民に代つて篤く感謝するッ』

と力ある聲で云へ終ると堅い脣を結んだ。流石の聯隊長も軍旗に對する今の場合は、只熱涙に繁げる許りである。

『聯隊長殿。我々は飽迄軍旗を守護致します』

『賛成〳〵。我々はメッッを捨てゝも軍旗を捨てると云ふ事は出

來ませんッ』

と士卒は口々に叫ぶと共に、悲憤の涙を振り散らして聯隊長と軍旗を取圍んだ。

其の決心の色を見たるペアン聯隊長は、

『好矣解つた』

と軍旗を捧持したる旗手の面前に立つて最敬禮を施した。ア、之ぞ我が聯隊の武勇と共に、各地の戰場に美名を轟かせた、軍旗に對する最後の敬禮であると思ふと、感慨胸に溢れて暫くは銅像の如く突立つた。

夫から劍を拔いて、全聯隊に對つて、軍旗に對する最敬禮の號令を傳へると、全聯隊の士卒は肅然として、メッッ城頭を吹くそよ風に、力なく靡く軍旗に最敬禮を施こした。日頃は勇ましく陣

頭に起る喇叭の音も、今日に限つて士卒の堅き胸から暗涙を誘つて、餘韻は長く病恨斷腸の思ひをなさしめた。

敬禮が終ると、ペアン聯隊長は、副官の携へて來た斧を持つて

『汝等よく承はれ。聯隊長は本日佛蘭西國民に代つて、忠勇なる汝等に軍旗を分與する』

布達を聞くと、佛蘭西〳〵と、全聯隊の士卒は幾度となく叫んで拍手した。

此の騷擾の間に、聯隊長は斧を振つて軍旗を寸斷して、夫を各大隊長に渡し士卒に分與せしめた。

ペアン聯隊長が涙を拂つて幕營に入ると、若い逞ましい旗手は斧を取り上て、限りなき悲憤の瞳でメッツ城外の敵陣を睨らんだ斯くして親衛擲彈兵第一聯隊の軍旗は、永遠に普軍の手に送られ

す、各士卒の當時を語る話題の材料となり終つた。

其の後ペアンの聯隊は、ズアーブ第一聯隊と合併して、親衛旅團を編成の上、普軍の檢閲を受けることになつたが、ズアーブ聯隊長はペアン聯隊の軍旗處分法を聞くと、直に軍旗と旗竿の鷲章を寸裂して、以て普軍の手に渡さなかつた。

メッツ開城當時、佛蘭西の將校となく士卒となく、軍旗のために痛恨の涙に咽んだ事は、我が生命を絶たれるよりも寧ろ勝つて居つた。其の幾多の悲劇は今も戰史に殘つてゐる。

あゝ落日の傾く處。城頭一旒の三色旗なく、千兵肅として暗涙に咽ぶの當時を思はゞ、只机上徒に長嘆息を發するのみ。

二六　歩兵第三聯隊旗

軍旗を裂いて聯隊全滅す

バザイン將軍がメッツに封鎖されたる當時、ナポレオン第三世は、皇太子と共にシャロンに逃れて來たが、是非メッツを救はふと云ふ計畫から、マクマホン將軍を從へて八月廿一日シャロンを出發した。普軍では皇帝の出軍と知らず、只マクマホン將軍が出軍したと云ふ報告を受けたから、彼を途に要擊して降伏させるかさもない時には戰死させるか、と云ふ二ツの目的から、急に軍を派してステーネイを占領させた。

このステーネイと云ふ地點は、マース河方面の一要害であつて兼からてマクマホン將軍は、萬一もバザイン將軍が、メッツ城から脱出することが出來たならば其處で會合する。左もない時は其處からメッツへ向つて進擊しやうと、腹算して居つた處であつたから、斯う普軍に先を越されて見ると、マース河方面に向ふことも出來ず、遂に進退の時機を失なつて頻りする降雨を衝いて、烏羽玉の暗の夜に、ナポレオン第三世を奉じてセダンの要塞に入つた。これは八月三十日の夜であつた、將軍は直に左右翼を張つて守備に就くと、翌日は既う普の全軍が雲霞の如く、寄せ來たつて攻勢をとつた。

九月一日稍ゝ秋冷を覺ゆる朝。普の一軍は佛の左翼を破つてバザイルを占め、尋いでバランに軍旗を翻へさせて、薄暮の頃は星

影を追ふてセダン城門に迫つた。

又佛の右翼に向つた普軍は、村落から村落に張つた陣營に、襲撃を加へて佛軍の要衝を破り、ヒシ〳〵と押し寄せて來たから、流石猛烈なる佛軍の騎兵襲撃は其効もなく退いた。

そして、敗走した處の佛軍の大部隊は、セダンとガレネとの間にある狹路に集まつて、敵に向つて抵抗する處ではなく、無暗に我が將校の非を聲らして、騒擾すると云ふ始末である上に、普軍の砲撃は劇烈であつたから、城中の上下は應戰する勇氣もなく、嘗ては歐洲の覇王を以て、自ら任じて居つたナポレオン第三世帝も遂に八萬の將士と四百十九門の巨砲と、其他一切の軍器とを普軍に渡して降伏するの運命となつた。

斯くしてセダン城頭の三色旗は落散つたが、此城中には普軍の

思ひ依らざる佛蘭西皇帝、ナポレオン第三世が居つたから、從つて軍旗の如きも數多くあつた。

で開城と決すると共にメッツ城頭と等しく、壯絶なる軍旗燒失の幕が開かれた。

又開城以前の戰ひに於いても軍旗の奮闘は頗る多くあつた。

之もその内の一である。歩兵第三聯隊は敵の急襲を受けて、全く隊形を失つたが、早くも旗手が軍旗を一丘阜に樹てたるを見ると士卒はその軍旗の下に集まつて來た。

此時セダン城外の普軍は潮の如く寄せ來つて、劍影閃めく白兵戰に移り、一擧に佛軍を屠らうとする勢ひであつたから、一孤軍の能く支ふべき處ではなかつた。

斯くの如き場合でも第三聯隊は名譽ある軍旗を穢す事を恐れた。

聯隊長は包圍せる普軍に向つて、幾度か勇敢なる突擊を試みたが到底此の重圍から退路を求めて、懷かしき我がセダン城頭の陣營に還るべき策もなかつた。

あゝ萬事終る。

聯隊長は齒を咬み鳴らして、腑甲斐なき此の境遇を皇帝のために怒號したが、又何うする事も能きなかつた。奮鬪して敵中に斃るゝ部下を見。敵彈に打たれて目前で虛空を摑んで倒るゝ部下を見ると、彼は蹶然勇躍して重圍中に飛び込みたい程であつたが、心に掛るのは我が軍旗であつた。

聯隊長はこの奮鬪中旗手に向つて、

『旗手軍旗を渡せッ』

と叫ぶと共に、旗手の手から奪掠するやうにして軍旗を取つた。

『聯隊長殿ッ……』

と絶らうとす旗手を、聯隊長は、

『放せッ』

と睨らんだ儘、血の滴たる軍刀を、捧げつゝ敬禮を終ると同時に、えッと十文字に切り破つた。

『旗手。我が聯隊の軍旗を敵に渡せば、何の顏かあつて他日佛蘭西國民に見みえる事ができる』

と聲を震はせた。

旗手は、その寸斷されたる軍旗を抱いて、空しく敵陣を睥睨した。此の光景の悲壯なる事は、セダン敗陣を背景として、一層印象を深めたる悲劇であつた。

これが終ると聯隊長は直に傳令に命じて、生存せる各將校を呼

び來らしめ、奮戰に疲れたる彼等の姿を見ると、優しく肩を敲いて其の一片宛を渡した。

斯くして全滅せる歩兵第三聯隊旗は、永遠に普軍の手に渡らなかつたのである。

二七　歩兵第九十六聯隊旗（上）

軍旗を抱へ駄馬に乘つて走る

佛國のセダンが、將に陷落せんとする時であつた。普軍は遠く左右翼を張つて、一擧にして此城砦を蹴落す覺悟で攻擊を加へた。

セダン城中の佛軍は、悉く防備に駈け向つて、反對に彼等を退却せしめやうと企てたが、常に戰機を失つて、敗軍に敗軍を重ね

て居るマクマホン將軍麾下の軍は、到底勝色を見る事が出來なかつた。

此時佛の歩兵第九十六聯隊は頗る惡闘を演じた。彼の聯隊は遂に白兵戰に移つて、銃槍閃めき喊奮聲ひ、何時か城外は紅の川となり、死屍は積つて山となる如き光景を呈した。

『聯隊全滅援兵を乞ふ』

と云ふ傳騎は、幾度か後方部隊に飛ばされたが、如何にせんその後方部隊も、戰闘酣であつて、援助する處では無い。窮鼠却つて猫を嚙むか、聯隊兵は必死となつて普兵に當つた。彼等は一騎當千の勇を奮つて突入を試みたが、不幸にも敵の銃彈は頻りに飛び來つて、軍旗を硝煙中に翻へして居つた旗手を斃した。

旗手が斃れると同時に、軍旗もバタリと草上に横倒れて、最後

の士氣に大打擊を與へた。之を見て……

『失敗つたッ軍旗が』

と皆まで云はず飛び來ッたのは、中隊附のボナード少尉である。

少尉が軍旗を取つて起たうとする背後は、既に普兵の群集であつた。彼等は旗手の死骸を荒々しく踏越えて、ボナード少尉を突かうとした。

少尉は猛然として體を開き、一歩踏込んで敵卒を蹴つた。

『馬鹿ッ』

と云ふ間もなく、味方の敗兵に向つて、

『徒らに死ぬナ。軍旗を護衛せッ』

と叫んだがその聲が、鮮血淋漓となつた殘兵の耳に、百雷の如く響くと敗兵は四方から馳せ付けた。

この聯隊の殘兵は、又暫く最後の奮鬪を試みたが、敵兵は益〻多數となつて、頻りに急射擊を浴せて來た。

ボナード少尉は、如何にもして此の重圍の中から、軍旗を捧持して脱出しやうと、勇猛に敗兵を指揮して居つたが、武運拙くも敵の彈丸にその臀部を貫通された。

少尉は思はず膝を突いた。『あッ』

『少尉殿。御負傷は』

と一兵卒が馳せ寄ると、少尉は苦痛を耐へて、『ウム大丈夫』

と再び起つて、軍旗を抱へた儘。一方から無二無三に猪の如く脱出を試みた。

敵兵は血染の軍旗を抱へた少尉が、將に脱出せんとする光景を見ると、直に追ひ馳せて取圍んだ。

あゝ少尉は力盡きた。歩兵第九十六聯隊の軍旗は、敵の戰功を誇るべき好紀念として、彼の手に渡らうとした。

この刹那疾風の如く馳せ來つたのは、九十六聯隊のオブリー大尉である。大尉は敵の重圍を蹴散らして、ボナード少尉に折重つた敵兵を突いた。夫から蠻勇を奮つて投げ捨てた。

宛然阿修羅王の荒れ狂ふが如き光景である。

『ボナード少尉。軍旗は確に預つたぞ』

斯う云つて彼は腹部を地殼に大磐石の如く伏せて、軍旗を緊と抱へて居つた、少尉の耳に口を寄せると少尉は、

『あッ大尉ですか何卒』

と重傷を耐へて軍旗を渡した。

握手する遑もない、殆んど瞬間である。大尉は軍旗を受取らると、無抵抗のまゝ彈雨の下を疾風の如く走つた。

然し敵兵は追ひ迫つた。……。

大尉は味方の死骸に躓付いて前に倒れた。

我破と起つて走つた。……。

又敵兵に、軍旗の竿を抑へられて膝を突いた。

夫でも猛然と起きて駈けた。……。

又倒れた。此時肉迫して來た敵兵が、背後から銃槍で突殺さうと云ふ光景であつたから、聯隊の一兵は韋駄天の如くに飛來つて、

『己ッ』と大喝して横から突いた。

續いて馳せ付けた聯隊の兵は、辛くも敵兵を食止めて殊死して戰つた。

大尉は此の援護を得て、勇氣は更に百倍して奮然と起つた、そして又軍旗を雙手に抱へて走り出した、……が此時彼は遙に野戰病院の駄馬が、前足を立てゝ駈け廻つて居るのを見つけ、之ぞ天の與へと走り寄つてヒラリと飛び乘つた。

『我が神よ。佛蘭西のために……』

斯う胸に祈つて、大尉は拍車もない靴の踵で馬腹を蹴つた。

此の光景を見たる敵兵は、また馳せ寄つたが、大尉は後も見ず一方を破つて辛くも脱出した。無論聯隊の兵卒は、軍旗と大尉を援護するために、蠻力を奮つて敵兵に當つて、大尉が硝煙の間に見えつ隱れつ、飛び去る方面に彼等の顏を向かしめず、幾分時かの最後の惡鬪を續けて居つた。

オプリー大尉は安全なる地點に來て、初めて駄馬の首筋を叩いて。

『君有難う』

と。此の勇敢なる士官は獸類にまで感謝の意を表して、

『さうだ。聯隊で行賞のある時は、此奴の胸に第一番に飾つて遣らないと不可ないナ』

と呟やいた。

無論軍旗は九十六聯隊の、新らしい若い旗手の手に渡されたのである。

二八　歩兵第九十六聯隊旗(下)

旗手雪夜軍旗を掘る

セダンが開城する事になつた。この時佛蘭西の歩兵第九十六聯隊長大佐ブクユエンは、陣營の小影に旗手を招いて、

『旗手。君は今夜の内に聯隊旗を何處へか埋藏して呉れ』と沈痛の聲で賴むが如く命令すると、

『ハイ大佐殿』

と旗手は小聲で固く誓つた。

さて旗手は軍旗室に歸つて、椅子にどッと軀を靠せて腕を拱いた。安全に軍旗を埋藏すると云ふ事は、この場合彼にとつての大事業である。彼は如何なる地點に、如何なる方法を以て最も安全に埋藏しやうかと暫く考へて居つた。

『好矣。佛蘭西のために』と旗手は暫くしてから卓を打つて立つた、夫から軍旗に最後の敬禮を施して、旗竿の鷲章と共に、何時

の戰爭にも廣くあれ、大きくあれと祈つた軍旗を、小さく小さく丸めて了つた。

そして彼は大圖囊を取つて、無理に軍旗を押籠めると革紐で緊と絡げた。彼は昨日まで斯うした悲劇の主人公に、自らなる事はあるまいと思つて居つたが、夫を今自ら演ずる境地に立つたかと、冷たい涙が自然と頰に傳はつた。

『あゝ敗軍の旗手となるものでは無い』

曾ては全聯隊の猛者と云はれ、他の將校の羨望の的となつた旗手も、我と我が悲境を嘆せざるを得なかつた。

旗手は萬事を畫すると、窓を排して寂寞極つて昔日の影なき、セダン城頭を見た。折柄大戰爭後の大雨である。

『左樣だ。此の降雨を舞臺に仕事を遣らう』と旗手は忠義なる一

從卒を呼んだ。

『オイ十字鍬を持つて來い』

從卒は、命ぜられたる如く十字鍬を携へて、篠衝く如き降雨の中を旗手に從つた。

『忍べ。必ず聲を發するな』と旗手は從卒に囁きつゝ、燈火も淡き陣營と陣營の間を縫つて、セダン要塞の一角に近き一丘地に出た、敵の目を忍び味方の眼を忍び、斯うした地點に出づると云ふ事は意外の苦心であつた。

旗手は、自ら四隣に警戒を加へて、極めて靜に從卒に十字鍬を取らせた。

『巧く掘れ。此穴が聯隊の死活に關するのだぞ』と。鋭く囁くと從卒は、

『ハイ中尉殿』

頓て聯隊の生命を葬むるべき穴が掘れた。其穴を見ると、旗手は感慨胸に溢れて、暗涙は折からなる降雨よりも繁かつたが、是非なく涙を拂つて、軍旗を藏めた圖囊を埋めて了つた。

二人は軍旗の埋藏を終ると、出來るだけ注意深く、地上を舊態に復してから、他日の爲め丘陵の突角を目標として、頭に刻んで歸つて來た。旗手は從卒に固く他言を禁じ、其旨をブクユエン大佐に復命した。

其翌日。旗手は第九十六聯隊と共に、普軍の捕虜となつて普魯西に護送せられた。所謂配所の月を見る度に、セダンは彼方我が聯隊の軍旗は彼處ぞと、片時も忘れる暇はなかつたが、その翌年の三月十七日、旗手は他の佛蘭西軍隊と共に、赦免せられて無事

に歸國の途に上る事ができた。

捕虜と云ふ境遇の下に、屈辱を忍んで居つた彼等の一行は、オレンヂの花の、既に咲かうとする故國の山河に接すると、歡樂の夢溫かき花の巴里に向つて先きを急いだ。

が、旗手は彼等が腕を組合つて、舞踏する仲間には加はらなかつた。心密に。

『俺れには任務があるッ』

旗手は佛蘭西へ入ると、直に一行から脫け出でゝ服裝を變へ、そしてセダンへ向つた。

彼はマース河を渡つて、遙にセダンの城砦を望見した時、云ひ知れぬ悲しさが胸に滿ちた。國亡びて山河あり、彼處の森彼處の村落、曾ては我が同僚の聲と、我が士卒の姿を見たのであるが、

今は普軍の占領するに任せて、春風の吹く邊り、野菫の花さへ蹴散らされてゐた。

漸くセダンに近付いて望見すると、要塞一帶の地には普軍が戰後の偉力を奮へ、高く軍旗を翻へして屯營してゐた。此の普軍の陣營を見ると、旗手は茫然として天を仰いで嘆聲を發した。

夫は外でも無い。曾てセダン籠城の際、軍旗を埋藏して居つた地に、普軍の陣營があるからだ。然し旗手は彼の丘陵の一角を目標に進んで見た。恰も賤夫が普の陣營から投ずる、殘物を拾ふが如き態度で……。

だが埋藏地の傍には、普軍のバラックが出來て、髯の濃き彼等は代る〳〵汚物を其地に捨てゝ居る。假令地中の軍旗は無心であるとも。之を見たる多血的の佛蘭西國民は、何うして默視する事

が出來るであらうか、旗手は稍〻暫く其の附近を徘徊したが、何うしても彼等の眼を竊む事が出來なかつた。

『絶望』

と云ふ叫びは、血の湧き沸ぎつた、彼の胸を高く動搖させた。捕虜となつて七ケ月間。假令故郷の父母を思はない時はあると も、佛蘭西の軍旗を思はない時はなかつた。彼は花羞らう戀人を想ふが如く、歩兵第九十六聯隊の軍旗を思つた。月下汗馬に鞭打つて、金髪艶なる美人を掠奪すると云ふコサックの騎手を、彼は幾度か羨望して夢に迄見た。

コサックの騎手が、美人を掠奪する力を我に借さば、セダンの軍旗は再び佛蘭西の軍營に翻へるであらう……と彼は晝となく夜となく、セダンの空を仰いでは血の湧く胸を拳で高く打つて居つ

た。

その七ケ月の苦心が、今は全く畫餅に歸するのである。寶の山に入りながら、彼は手を空しくして去らなければならぬか？

旗手は頓て喪心せる旅人の如く、この印象深き古戰場を去つてセダンの村落に入つた。彼は村落に入ると同時に、シユウリエと云ふ男のある事を思ひ浮めた。シユウリエは、セダン要塞に出入の職人で、非常に愛國心のある勇者であつた。彼はセダン開城の當時まで、職人としての仕事よりも、兵卒としての仕事を好んで居つた。

そして彼は第九十六聯隊の陣營に、最も多く昵懇者があつて屢屢軍旗の下で、廣い胸を打つては佛蘭西のために誓つた。

旗手は其のシユウリエを思ひ浮めると『彼があつた、彼があつた』

と呟いて、其の村落にシユウリエの家を尋ねた。

シユウリエは、セダン開城後。普軍のために三色旗を引き下されたる事が、胸糞が悪くつて堪らなかつた、と云ふて復讐する手段はなし。毎日『隣家の強盗奴が』と空ッ腹ばかり立てゝ居たのだ。

其處へコツ〳〵と破扉を敲いたのが、彼の旗手であつた。夜の事で、脚のヨタ〳〵する卓の上には、獸油の燃え澁ぶる裸燈を置いて、伜の小シユウリエと毛髪の縮れた妻と三人で居つた。

『シユウリエはお宅かネ』

斯う云つて破扉を敲くと、農婦でも肩のスラリとした、佛蘭西の女は起つて來た。

『ハイ。貴君』

『ちよつと逢ふと解るのだが』

と女に構はず室内に入ると、伜の小シユウリエは、利巧さうな眼で早くも透して覺つた。

『お父ッさん九十六聯隊の旗手の旦那だよ』

『ほうセダンの……』

とシユウリエは、斯う云つて起つて來た。彼は恐縮したやうな態度で、旗手の外套に接吻した。

『旦那』

『シユウリエ』

二人は舊懷に耐へないと云ふ形であつた。

まづ兎に角と云ふ譯で、旗手は小シユウリエが塵を拂つてくれた椅子によつた。

妻は自分で、この應接がうまく出來なかつたから、プッと下膨

れに無教育の女特有の眼の色を見せたが『聯隊の旦那』と聞くと、俄に様子を變へて、歡待に餘念もなかつた。

『シユウリエ。僕は君の力を借りたいと思つて來たのだよ。佛蘭西に忠勇なる國民と見て』

暫くしてから旗手が云ふと、シユウリエは無造作に幾度か點頭いて、

『ヨウがす共。先づ聯隊の旦那が尋ねて下さるのは、此村でもシユウリエの家より無いでさア……』

と煤ぼけた頭の上の十字架を指差して、

『イス樣に誓つて。旦那』

『有難う。夫を聞いて僕は一個軍團の援兵を得たよりも嬉しいよ』

と旗手は手短かに、セダンに立ち寄つた目的は、開城當時埋藏

した軍旗を掘り出すのにあると語つて、

『處が來て見ると、普魯西の陣營の傍で、何うする事も出來ないのだ』

と溜息を吐いだ。

シユウリエは唸るやうな態度で、雙腕をくんで聞いて居つたが旗手の話が終ると、

『夫は困難の仕事ですが、シユウリエとなら巧く遣れますわイ』と答へた。

『巧くやれる。さうなると有難いンだ。僕は君の力を借りて、普魯西の奴等の足元をそつと掘つて、夫から軍旗を聯隊に持つて歸りたいンだ』

『さうなせえ佛蘭西の士官さん。俺は職人だが、國家のためなら、

生命も投げ出しまさァ』

『お父ッさん僕も行きます』

と傍らから突然叫んだのは、伜の小シユウリエであつた。

『お父さん宜いでせう。僕も佛蘭西のために行きます』

親爺が默頭いて居ると、旗手はその若者に握手を求めた。

『有難う小シユウリエ。佛蘭西はモウ君のやうな青年のものだ。バザイン將軍もガンベッタも無いンだよ』

『夫は本當の事だ』

と親爺も笑つた。

そして此の父子は協力して、旗手を助ける事になつた。其夜旗手は、シユウリエが家のガタピシする寢臺の上に臥つたが、翌朝起きて見ると、セダンは一面の銀世界となつた。

此雪には、シユウリエの妻までが、ガミ〳〵と罵り立てた。だが斯うなれば運命は、神に任せるより他に好手段がない、三人は其夜白雪を踏んで、普軍の陣營近く潛行した。

其の途すがらも夜の雪風は、三人の頰を削るが如く吹きすさんで手足は凍える程であつたが、軍旗のために勇氣を鼓して普兵の目を忍び、雪の隧道を掘りつゝ進んだ。

旗手は斥候に等しく、耳目を働らかせて四隣を警戒したが、まづ此擧は無謀と云ふべきが正當だ。何故とならば彼等は、普の陣營に忍び入つて、哨兵の立つて居る軍旗を掠奪するよりも、なほ難い事業を試みやうとするのであるから……。然し三人は、辛くも軍旗の埋藏地點に着いた。

夫から彼處此處と雪中を探ぐつて、目標とした凸角を當に、凍

固せる地盤を掘り試みた。三人は一鍬毎に血眼で、瞬間の恐ろしさに耳を欹てゝ居つた。やがて其の内に鍬の先さがザッと、軍旗の革嚢に當つた時は、殆んど此處に我身ある事を忘れた。

『占めたッ』

と云ふと旗手は鍬を捨てゝ、倒るゝ如くに軍旗を抱いた。胸。胸。彼の胸は千萬無量の思ひ!!!

三人は雪の村落を漁つて、獲物を得た熊の夫よりも、注意深く普の軍營を離れた。

頓て村落に歸へると三人はホッとして、代る〳〵軍旗にキスした。でシュウリエの妻は待ち構へて居つて、彼等が戸を敲くと同時に引き明けたが、内へ入ると妻は、裸燈の火の消える程高く飛び上つた。

『お三人さんのお顔は』

成程、斯う云はれても無理はなかつた。三人は泥まみれの軍旗に顔を埋めては、代る〳〵キスしたので、全然喜劇へ出る左官屋のやうな顔になつてゐた。

旗手は、他日恩賞の上申を誓つて、此の忠勇なる職人父子に別れた。そして彼は、三月二十九日に突然泥まみれの軍旗を捧持して、我が聯隊に歸營した。

これまで軍旗がないので、沈痛の色に覆はれてゐた第九十六聯隊は、旗手の捧げたる軍旗を見ると、全營聲を極めて感激しつゝ、その軍旗を迎へたが、此の光景は血あり涙ある日本の讀者には只想像に任せて置かう。

露西亞

二九 イエレッキー聯隊旗（露土戰爭）

老旅團長自ら軍旗を振つて進む

千八百七十八年一月七日午前八時。露の前衞なるコサック兵は諸方を搜索しつゝ、敵に向つて前進を起した。勇猛なるクロック大佐は其の前衞を率ゐてコサック兵に續行した。戰鬪は開始された。

午前十時。司令官ミルスキ公は、主力の先頭に立つて戰鬪をな

しつゝ、前進する前衞に續いて沈默して進んだ。

ヤニニー村ハスキオイ村の二村は、クロック大佐の前衞に蹴散されて占領された。敵は全戰地に背囊、炊事具、被服等を放擲したる儘、遁逃して仕舞つた。此時露兵は自分達の破損した靴を脫ぎ捨てゝ、土兵の死骸から靴を奪つて穿いた。

前衞は、敵の主力の集つたシプカ村の、前方約三千米突の距離に至ると、一歩〳〵に緩進して、主力は戰鬪隊形に於いて相當の距離を取つた。朝風に飜つて各聯隊の士氣を勵ますものは、十字架を飾つた軍旗である。

シプカ村の前方なる積雪の上には、土軍の防禦工事がある。發火は全く沈默して露軍も靜肅であるが、土兵も一發も射擊をせぬ故に或る兵は既にスコベリユー將軍の援兵が來て、土軍を降伏せ

しめたのでは無いかとまで思つて囁いた。

司令官ミルスキー公は本部を率ゐて、馬を前方に飛ばせた。其時始めて土軍の榴散弾は、本部の頭上に破裂して、若干の馬匹を斃した。露軍は土軍の目標距離に入つたのである。

激烈なる敵の射撃は多く本部に雨注した。負傷兵は其處此處の積雪上に倒れた。司令官は悠然として左右を顧み、

『予は他の地位を取らう』

と土軍の榴弾に追隨されつゝ、徐々に左方にある小丘上に騎行した。

此處から二三の散兵大隊に敵の砲臺の略取を命じた。散兵大隊は直に山砲の放列を布くと同時に、射撃を開始して全攻撃に懸つた。敵の砲臺は僅か三門の重野砲であつたが、露軍の山砲に比較

すると頗る威力の大なるものであつた、然し勇敢なる山砲は常に重野砲を制して居つた。砲撃の下に散兵は、頗る勇敢に前進して突撃したが、敵の猛射のために損害が多く、攻撃地は忽ち死傷者の山を築いた。

司令官は始終沈着であつて、毫も動揺する色がなかつた。頓て一副官を呼んでイエレツキー聯隊へ差遣した。

副官は聯隊旗の下に居つた、聯隊長の前まで馬を飛ばせた。

『イエレツキー聯隊も亦シプカ村に向ひ前進するもの丶第一たるの榮譽を得べし』

シプカ村は土軍の全陣地であつた。

聯隊長クローマン大佐は、この命令を受くると、忽ち馬首を聯隊の前に立てた。

『聯隊はシプカ村に向つて前進するものゝ第一たるの光榮を負ひ……進め』

と指揮すると、將校と下士卒は聯隊旗に向つて空に十字架を畫き、決然たる色を以てクローマン聯隊長の儼然たる態度を見た。射撃は益〻激烈であつて、司令官の近傍は常に目標となつた。傳騎の二名のコサック兵は戰死し、傳令將校の馬は斃され、その主人の青年將校の如きは、下腹部を全形の榴彈に抉り取られた。斯くする内に、喜ぶべき情報は司令官の手許に來た。『砲臺は我兵之を略取せり。六十名のバシボスク兵は又捕虜とせり』

イエレッキー聯隊は猛射を浴びつゝ、セウスキー聯隊と共に驀進した。クローマン大佐は軍刀を揮つて、頻りに前進を促したが、土軍は殘酷なる射撃を加へて、一歩も彼をして前進させまいとし

した。

將校は續々負傷して、後方面にあつた老將官旅團長ドンブロースキーも鎖骨を射られたが、彼は副官の手もからず、自ら繃帶を施して頻りに突撃の命を發した。然し土軍は益〻新兵力を以て、刻一刻に猛烈なる射撃を加へ、聯隊は一時攻撃を中止せんとする迄の悲境に陥つた。

時に冬季嚴寒の爲に、積雪上の死屍は直に硬直になつて、重傷者の多くは、非常なる苦痛を受けて絶息する。拳は堅く握つたまま腕を高く突いたのが其處此處に倒れて居つた。白雪は鮮血に染められて、恰も美くしき櫻花の亂れ散つたやうである。この壯絶なる積雪上を聯隊兵は敵壘を目掛けて猛進を企てたが、敵のチエルケッセン兵は奮鬪を續けて露の戰線を縮めやうとした。

『全線突擊』

とグローマン聯隊長は怒號した。そして彼聯隊旗を戰線上に進めて、聯隊副官ダウキドーと共に馬を走られたが、忽ち敵彈は飛んで彼を射た。彼は重傷に耐へで軍刀を投げて落馬すると、副官ダウキドーは直に馬上を飛び下つて走せ寄つた。

其時再び飛び來つた敵彈は、この勇壯なる副官の胸を射て、グローマン大佐の上に蔽はせるが如く倒した。軍旗は壯絶なる重傷者の上に垂れた。

『聯隊長負傷』

と云ふ報告が、聯隊の戰線に傳はると、士氣は旭日に照らされた白雪の如く消えた。

斯う云ふ事は、日露戰爭にもあつた。彼の奉天の役で露軍の某

聯隊では聯隊長が戰死すると共に、將校以下は悉く我が黑木軍に投降したのである。

流石のイエレツキー聯隊の兵も、グローマン大佐の負傷を聞くと、その銃を捨てゝ背進を企だてたが。この光景の急なるを見た老將官ドンフロースキは、自ら聯隊の戰線上に立つて軍旗を高く捧持した。

『汝等は軍旗の光りを輝かせ。イエレツキー聯隊の名譽ある軍旗は勇躍して戰線にあるぞ』

聯隊は軍旗を仰ぐと、再び猛射を浴びて白雪上に奮擊した。斯くして聯隊はこの日の戰鬪を落日と共に中止する迄惡鬪を續けた。

三〇　狙撃第四聯隊旗

軍曹從僕の姿となつて軍旗を全す

千九百五年三月九日。奉天府は日本軍の爲に全く包圍せられて茲に陥落の運命を見た。東洋に來れる露帝の忠臣は光榮の的たるグラルギー勳章を捨てゝ北鐵嶺に隱れ、或は白旗を高く掲げて、日本軍の先頭部隊の兵卒にまでも握手を求めた。

此時。露の狙撃第四聯隊も最後の奮鬪を終つて、日本軍の突擊に隊形を亂し。將校の指揮をも用ゐずして、雪崩の如く奉天街道を走つたが、多くは日本軍の追擊隊に霰と降る砲彈を浴びせられ

て、遂に銃口を高く揚げて降意を示めす逆境に立つた。

旗手ワシリー・ネステロフも軍旗を捲いて、疾風の如く奉天街道を飛んだが、敵の流彈のために重傷を受けて、輪聲と靴音と叱咤する聲の轟くとも、思へる黄塵の裡に倒れた。旗手に遲れて走つたのは、聯隊附の軍曹アンドレイラートニコフである。彼は旗手の重傷を見ると、肩にかけた小銃を捨てゝ走り寄つて後から抱き。

『堅固なさい旗手殿。小官が今繃帶を致しますから』

と隱囊から繃帶を出さうとすると、旗手は殺氣漲る後方面を見た。硝煙は濃かに砲聲轟く彼方からは、人馬亂れて疾驅するを追ふて、敵の一隊は破竹の勢で迫らうとする光景である。

『あッ繃帶よりは軍旗を……』

『軍旗を破らうと云ふのですか』

『さうだ。軍旗は我が第四聯隊の生命だ。假令死しても之を奪はれてはならぬ』

重傷を忘れて旗手は、軍旗に縋つて見たが、又撞ッと倒れて瀧津瀬の血汐は、之を助けんとした軍曹の肩から染めた。

『駄目だ。軍曹。本官に構はずと早く軍旗を賴む』

と北鐵嶺を震ゆる手で指差した。軍曹は敗兵の北に南に絶叫する聲を聞いて、高く四隣を窺つたが、撞と旗手に倒れかゝつて、

『モウ駄目です。敵は敗兵までも包圍致しました』

『ムさうか』

と旗手は辛くも自ら軍旗の紐を解いて、旗竿から旗布と飾釦を取つた。

『軍曹之を持つて聯隊に走れ。皇帝の御爲めに』

軍曹は軍旗を纏めて受取つたか、心に掛るのは旗手の重傷である。既に追ひ迫られんとする敵を見て、旗手一人は置けないと思ひつゝ、血汐に浸された旗手の、腕をとつて肩にかけやうとすると、旗手は自ら避ける如く蠢いた。

『早く軍旗を。皇帝の。皇帝の御名によつて』

顧みると、敵の喊聲は近くなつた、軍曹は『神よ』と空に十字を畫いて、膝突いて旗手の腕の血汐をすゝつた。

『旗手殿。軍旗は確にお預り致しました』

旗手の朱に染れた顏は、白い齒を見せて凄怨の笑を現はした。軍曹は血涙を呑んで情調を斷つた、頭を振りつゝ大きな胸を抱へて、旗手と旗竿を捨てゝ走つた。

此時軍曹は到底滿足では、敵の追擊軍の重圍を脱する事は出來

まいと思つた。敵の鋭い茶褐色の瞳を眩ますには、何うすれば好いかと走りながら考へた。處が彼は路傍に跳飛ばされて、寒げに斃れたる一從僕の姿を見ると雀躍をして走りよつた。

彼は手早く、着馴れたる軍服を脱ぎ捨て、從僕の死骸から上衣を剝いで、帽子までも取つて着被つた。軍曹アンドレイラートニコフは從僕アンドレイラートニコフに化けた。

『占めたぞ』と彼は呟きながら、軍旗を下着の裏に隱くして仕舞つた。

夫から敗兵に混りて、彈雨を浴びつゝ走ると、先手は敵の包圍軍のために待ち構へられて、續々と投降者を出して居つた。彼は胸を衝いた。

『あッ失敗た』

と頭髪を搔つて、地團駄を踏んでゐた。そこへ聯隊の將校オジスネフスキー大尉が、幾多の敗兵を叱咤しつゝ走るのを見た。軍曹は猶豫もなく、

『大尉殿。オジスネフスキー大尉殿』

と大尉の許へ飛付けた。

敗軍の將校は熱涙を呑んで、腑甲斐なき味方を罵つた。近く土耳斯でオンマンバシヤに勝つた露將スコペレフ將軍の參謀クロパトキンが、何たる策戰を遠く遼陽城で畫するのであらうと、齒嚙をなして敗兵を纏めやうとした。

其處を呼ばれた。振り返つて見ると、それは軍曹アンドレイラートニコフであつた。

『軍曹何うした』

『大尉殿。小官は從僕ラードニコフです』

『好矣解つた。して本官に用事があるのか』

『ハイ大尉殿小官はワシリーネステロフ旗手の最期に居合せて』

『おい皆まで云ふな』

と大尉は四隣を睨んで突立つとき敵は遂に肉迫して來た。大尉は無念さうに靴を踏鳴らしたが、軍曹に向つて『從僕貴樣は勝手の處へ行け』と命ずると、其儘高く白旗を振つた敗兵に續いた。

大尉の率ゐたる投降者の一隊を見ると、追擊軍の一部隊は軍旗を抱いて走る變裝者には目もくれず、一意に大尉オジスネフスキーを取圍んで仕舞つた。

狙擊第四聯隊の軍旗は遂に日本軍の手に渡らなかつた。

三一 狙擊第十九聯隊旗

軍旗を裂いて兵卒に分つ

狙擊第十九聯隊は千九百五年三月初旬の奉天の戰ひで、日本軍に包圍されて、遂に戰鬪力を失つて潰滅する運命に逼つた。

時に聯隊旗手中尉ショーゲは軍旗を敵に奪はれなば一大事であると、彈丸雨下の間に立つて、護衞兵を呼んだ。

『衞兵斯うなれば絶望だ。軍旗を敵に渡すのは殘念だから破つて仕舞ふ』

『ハイ中尉殿』

既に肉迫せんとする敵兵を樹蔭に避けて、彼は皇帝のために三

度高く軍旗を擧げて、夫から小刀でズタ〳〵に切り割いた。

アレキサンダー三世の頭字章と十字架とは自ら隱囊に秘めたが旗布は衞兵に分與した。そしてホッと息する間もなく中尉は敵軍の捕虜となつたのである。

三二　狙擊第百六十二隊隊旗

軍旗を服の裏に縫込む

露の歩兵第百六十二聯隊も奉天の戰ひに於いて、殆んど全滅せんとする場合になつた。

之を見たる聯隊旗手グリシャーフは、日本軍を睥睨して齒を嚙鳴らしたが、如何にせん大勢は既に定まつた。將校は敵彈に斃れ

兵卒は白旗を揚げて投降する。四面は敵。

彼は咄嗟軍旗を捲いて、兵卒の縱横する間に踏まれながら、旗竿から軍旗をとつて窃に外套の下から懷中に納めて捕虜となつた後に、軍衣の裏に縫ひ込んで保存した。

三三　歩兵第二百四十二聯隊旗

重傷者尙ほ軍旗を隱す

露の歩兵第二百四十二聯隊も奉天の戰ひに於て、日本軍のために擊攘さるゝ逆境に陷つた。兵の多くは奉天街道を北する隙もなく、隊伍を亂して四方に散つた。

此時旗手レヴ、ウイノグラードフは、敵彈のために重傷を負つ

て砲煙の裡に倒れた。其の軍旗の輝ける光彩の端を見ると、敵兵は『おゝ軍旗だッ』と一齊に叫んで疾風の如く走つて來た。

危機一髪。先頭の進んだ敵の指が、將に軍旗の旗竿に觸れやうとした時、旗手は勃然と起きて狐の如く飛んだ。鮮血は傷口から迸つてサッと靴跡を印したが、旗手は懸命であつたから、口を結んだ儘走つて、傍にあつた支那人の空屋に入つた。

幸福のとには敵兵は彼を追驅せず、部隊に入つて他方面の突擊に移つた。

旗手は軍旗を抱いて倒れたる儘。何れにか隱匿しやうと頻りに身を悶えたが、重傷は強く彼を壓して腕を伸ばす事すら許さなかつた。彼は是非なく血潮を浴びつゝ、空屋の土間に蠢いて居ると遙かに先刻の有樣を見て荒れたる獅子の如く飛び來つたのは、聯

隊の勇卒ニコライ、シャデフである。

ニコライシャデフは空屋の前まで、息荒く飛來つて四隣を見廻したが、其處の物蔭には何人の隱れ居る氣勢もないから、突立つて考へて見た。

『ハテナ此處まで來た姿は確に見えたぞ』

と頭首を傾げる機會に見えたのは、細長く滴々と曳いた、眞紅の血糊だ。ニコライシャデフは之を見ると指差すまでも無く、雨戸を蹴破るやうにして空屋に飛込んだ。

見ると聯隊旗手は蟲の息で、軍旗を摑んで頻りに腕を動かせて居る。

『あッ聯隊旗手殿』

『ウムお前は』

と旗手はシャデフの手を辛くも握つて、熱涙を弱い光りある瞳に宿らせた。

『旗手殿御安心なさい。敵は去りました。敵は遠く彼方へ』

と砲聲霹靂の如き激戰地を指差して、

『遠く彼方ですから御安心なさい』

ニコライ、シャデフは自分の携帶する繃帶を取出して、旗手の重傷へ捲かうとすると、旗手は朱に染まつた手を微に振つた。

『本官ぢやア無い軍旗だ。ニコライシャデフ軍旗を必ず死護してくれ』

『ハイ軍旗も死護します。貴官も死護します』

と彼は快活に云つて、繃帶を捲かうとする內に、旗手は顏色を變へて來た。

『モウ之は駄目だ。旗手殿。旗手殿。レウ、ウイノグラードフ中尉殿』

と冷たい耳朶に髭武者の頰を押付けて、呼んで見たが答は無かつた。

『之は駄目だ』と彼は呟いて膝から旗手を密と下ろすと、我が軍衣の內隱から小さい十字架を出して其の胸に置いた。夫れから暗涙を絞つて默禱しつゝ小刀で軍旗を小さく切斷した。斯うして彼は最後まで死護しやうと企てたのであつた。

此時流彈は彼方から飛び來つて屋內を貫くと、忽ち彼の勇敢なる露兵を射倒して仕舞つた。

ニコライシャデフは斃れた。斃れながら彼は神氣籠つてか、無意識の間に腕を伸ばして、旗布を傍の藁の間へ滅茶苦茶に突き込

んだ。

頓てこの茅屋附近の敵は去つた。彼等の閃めかする劍尖が遠く黄塵の間に隱れると、空屋の前には一人の支那人が現はれた。彼は靜に四隣を見廻しつゝ空屋に忍び入つて、旗手と兵卒の死骸を眺めた。

これは同聯隊の軍曹ワエスチヤエフが變裝したのである。ワエスチヤエフは其處此處と搜したが、ニコライ、シヤデフの傍の藁積の裏から軍旗を見付け出すと、直に懷へ藏くして空屋から出た。そして彼は樹蔭から樹蔭を迪つて村落の畑に入ると、遠く目標を求めて軍旗を埋匿して仕舞つた。

後軍曹は同僚のレベテフと云ふ軍曹に軍旗の處分法を相談すると、レベテフは窃に掘出して支那服に縫込んで軍服の下に着たまま捕虜となつた。

レベテフは日本の收容所で無聊に暮らす間に、二重底の箱を作つて、秘密に軍旗を封じ込んで置いて、遂に本國に持ち歸つた。

尙敗軍を重ねたる、露國軍隊の軍旗に關しては、我が軍隊で分捕品としたのもあれば、或は露軍自ら燒失したのもある　何れも大慘戰の中にあつて頗る悲壯を極めたものであつた。

軍旗物語

終

明治四十四年四月十日印刷
明治四十四年四月十二日發行

著者 松美佐雄
發行者 東京市日本橋區本町三丁目八番地 大橋新太郎
印刷者 東京市小石川區久堅町百〇八番地 水谷景長
印刷所 東京市小石川區久堅町百〇八番地 博文館印刷所
發行所 東京市日本橋區本町三丁目 博文館 振替貯金口座東京二四〇番

（軍旗物語奥付）

（定價金四拾錢）

著作權所有

陸軍中將 矢吹秀一君題辭
陸軍歩兵少佐 宍道省三君校閲

陸軍諸兵種解說

杉本文太郎君著

全一冊菊判美本
紙數三百十頁
正價 卅五錢
郵税金八錢

目次

●前編 諸兵種一般○勅諭○讀法○軍紀及風紀○聯隊歴史及び軍旗の尊嚴○兵役區分○陸軍常備團隊の配置及び編制○各兵科各部及び軍屬の識別並に性能○陸軍々人の階級○軍隊内務○陸軍敬禮式○勳章及び記章○褒章○休暇○恩給○陸軍懲罰令○陸軍刑法○陸軍懲治隊○三十年式歩騎兵銃保存法○服裝の注意及び手入法○救急法○射擊學○距離測量○兵語○地形の識別○方位の考察○徴候○記號及び暗號○命令及び報告の傳達○野外要務●後編 諸兵種○歩兵○騎兵○砲兵：輸卒：助卒○工兵○輜重兵：輸卒

●戰鬪圖解

杉本文太郎君著

全一冊洋裝菊判
紙數二百五十頁
正價金參拾錢
郵税金六錢

軍隊の編制各兵種の性能より充員召集行軍宿營戰鬪攻擊追擊防禦死傷者の處置戰鬪後の處置其他戰鬪全般に關する幾多の動作を圖解して些の遺憾あらしめず就中旅順の如き浦鹽の如き大要塞の組織並に攻擊を説明網羅するに至りては先人未だ這般の著なし陸軍に志あるもの豈に一本を購はざるべけんや

○博文館發行

諸名家及從軍記者分著

（全四冊）

訂正 日露戰史

洋裝四六二倍判 洋布上製
本堅牢 紙數一冊七百頁
正價 各一冊 金壹圓廿錢
小包料 一冊金拾貳錢

●毎卷日露戰鬪地圖——諸將軍題字——戰況實景寫眞版挿入

明治三十九年丙午元旦、始て日露戰史初卷を發刊し、爾來卷を重ぬること十有六、星霜を閲すること一年有餘にして、全部完了せり。當時嘖々の評、街衢に滿ち、洛陽の紙價、爲に貴きに至る、然るに今日より之を見る、既に善を盡す、未だ美を盡さゞるの憾あり、是に於てか、訂正改竄十六冊を更めて四卷に分つ。其表裝の偉麗にして堅牢なる宛も偉丈夫の堅甲冑を擐くが如し、之を東洋絶無の大戰史と謂はんも敢て誇言にあらざるなり。

●第一卷 日露初期の海軍より第三軍初期の活動迄（戰局地圖八葉、題字十六頁、寫眞版八十一枚）
●第二卷 第四軍初期の活動より沙河大會戰迄（戰局地圖九葉 題字十六頁、寫眞版八十三枚）
●第三卷 旅順要塞攻陷戰、奉天大會戰、北征陸海軍戰記（戰局地圖八葉、題字十六頁、寫眞版七十九枚）
●第四卷 海軍第一期作戰の成功、日本海大會戰、戰時の外交（大海戰圖一葉、題字十六頁、寫眞版七十六枚）

○博文館發行

東郷海軍大將題字　酒井伯爵題字　藤井海軍
齋藤海軍大臣題字　中村福井縣知事題字　中將序文

●殉難艇長 佐久間大尉

成田鋼太郎君編

全一冊洋裝菊判 紙數百八十八頁　正價 郵稅金六錢　金四拾五錢

口繪 大尉の小照と遺言書（コロタイプ版）外寫眞版十二枚挿入

昨明治四十三年四月十五日、突如として廣島灣新港沖に起りたる、第六號潛水艇の壯烈、悲慘なる最後は、蓋し世人の猶ほ未だ記憶に新なる所なるべし。而して此の大事の前に座して、從容遭難の顚末を叙し、將來に於ける我潛水艇の研究、發展に資せんとするの理に、熱誠能く其の部下を感ぜし同艇長の遺書を見るに及んで、泣かざる者果して之ありしや。實に本編は同艇長故佐久間大尉の傳記にして、之に依つて其の性行、閲歷は、遺憾なく窺ふを得べく、揭ぐる處の手簡類は、將に其の面目をして髣髴たらしむ。然も編者は、我教育界稀に見るの高士にして、大尉が生前敬慕措かざりし成田先生なりとす。本館は敢て本書を江湖に提供するを以て一大光榮とするもの也。

●第二軍從征日記

田山花袋君著　全一冊洋裝菊判 紙數四百六十頁　正價金六拾錢 郵稅金六錢

●此一戰

海軍少佐 水野廣德君著　全一冊洋裝菊判 紙數四百十八頁　正價金壹圓 郵稅金拾貳錢

○博文館發行

遲塚麗水君　內藤昌樹君共著

●露軍將校 旅順籠城實談

全一冊洋裝菊判 紙數二百九十四頁 寫眞版數葉挿入　正價 郵稅金六錢　金四拾八錢

著者內藤昌樹君は開戰當時長崎に在り、旅順開城し、露將來降ある毎に、乃ち往いて之を訪ひ、其籠城談を聽く。

悲愴悽惋聽く者 涙滂沱たるか覺ゆ、其の人情の機微に入り、身世の變化を極めたる一篇自然の脚本を露將語る所悉く肺腑より出で。

黑木軍通譯官　來原慶助君著

●黑木軍百話

全一冊洋裝菊判 紙數百七十二頁 寫眞版十頁挿入　正價 郵稅金六錢　金四拾錢

見よ!!! 日本武士の精神氣魄　萬代を照らす不滅の靈火

「內容」○陸戰勞頭の戰死者○豪傑を擊退す○一發巨彈のお見舞○山雨欲來風滿樓○正々堂々として江を渡る○赤裸で先登す○第一軍感狀の嚆矢○敵の敗戰理由○敵將の敗戰報告○紀念碑を摺鉢山に建つ○一兵卒敵の將校を生擒る○不染の股引半染となる○黑木大將の恐いもの○新刀の切味○白馬將軍を逸す○兵法の新發明○武運めでたき男○戰友よりも武器が大切○幽靈の正體見たり枯尾花○倭軍擊退の碑外數十項

少年日本歷史讀本

東京帝國大學文科大學教授
東京高等師範學校教授　文學博士　萩野由之君編著

日露戰役の結果、一躍して世界一等國に入り、日本帝國は、著しく韓國の班に併合し、領土擴張の際、博く民心を以て、益々國光を宇内に輝かし、此を觀る者、國忠愛國の名譽を重ぶ、而して帝國の尊榮を念せざるべからず。

兒童の腦裡に印せしむるには、光榮ある日本歷史を繙かしむるに如かず。本館茲に見る所あり、博士に囑して、最も趣味ある歷史筆致に依り、上古より天地開闢の日に至る迄、次行すべき敎育上に資すべく、逐次刊行せんとす。

第壹編●天の浮橋（既刊）
第貳編●大國主命（既刊）
第參編●天孫降臨（近刊）
第四編●橿原の宮（近刊）
（續刊）
●三種の神器　●新羅征伐
●厩戸皇子　●弓削道鏡
●藤原基經　●屋島の戰
以下每月一册又は二册宛續々刊行

正價各册　金拾八錢　郵稅金四錢

每卷洋裝菊判美本紙數一册百四十頁以上
石版彩色刷口繪一葉尾竹國觀君挿畫數十個

（博文館發行）

少年百科叢書

見よ!!! 少年學術界の大發展　少年百科叢書の創刊

少年は修學の時代也、故に其一日を怠れば、百年の悔を殘さん、殊に學界の波浪沿々として漲り、嶮山幾重に峙ちて、其前途や又決して安心すべからず、然るに學山の燈臺なり、學界の一大部に日韓併合逐次行はるるに至る迄、敎育上に資すべき健全なる良參考書の一缺陥なりとす、亦時代の即ち此缺陥に乏しきを補ふべくして創刊されたるものなり。我少年百科叢書は、我少年百科叢書に點なくして、一般家庭及び學校の珍寶たらん、諸君は勿論、無論、諸君の考書として、愛看を待つ。

洋裝最長形頗美本紙數每編二百七十頁美麗なる口繪數葉入

第壹編●先哲至言　勉學訓　少年世界記者　竹貫直人君編
第貳編●世界名君傳　前田越嶺君編
第參編●讀書法　少年世界記者　竹貫直人君編
第四編●世界名臣傳　前田越嶺君編
第五編●天界の觀察　澤田順次郎君編
第六編●地界の觀察（近刊）
●第七編以下每月一册又は二册宛續々刊行

正價各册　金貳拾八錢　郵稅各册金四錢

（博文館發行）

著共君月琴田福君波小谷巖

少年日本歷史

少年必讀平易明快なる三千年の活歷史

全六冊 洋裝菊判美本一冊百四十頁 正價各冊金廿錢 全部金壹圓拾錢 郵稅各冊金四錢

第壹編●古代の卷
第貳編●王朝の卷
第參編●亂世の卷
第四編●武家の卷
第五編●德川の卷
第六編●明治の卷

第一編目次 建國(上)。建國(下)。皇子の勇猛。三韓征伐
第二編目次 唐國振。奈良の都。平安遷都。梅花の餘香。望月の影。八幡太郎。
第三編目次 保元の亂。平治の亂。驕る平家。壽永の秋。鎌倉。筑紫の旗風
第四編目次 建武中興。足利尊氏の反逆。南北兩朝。室町の榮華。群雄割據。安土時代
第五編目次 關ヶ原。大阪落城。三代將軍。學問の復興と元祿の榮華。其他
第六編目次 錦の御旗。明治の新政。西南戰爭。立憲政治。日清戰爭。日露戰爭。

(發行所 博文館)

諸名家編著

少年文學

全部二冊 和裝中判 一冊百頁 紙木版 錦繪一葉宛挿入

正價各冊金拾貳錢 十冊以上八分引 廿冊以上一割二分引 郵稅各金四錢

(全部書目)

一編●こがね丸
二編●二人むく助
三編●今辨慶
四編●維新三傑
五編●雨の日ぐらし
六編●寶の山
七編●二宮尊德
八編●姉と妹
九編●當世少年氣質
十編●親の恩
十一編●紀文大盡
十二編●大石良雄
十三編●暑中休暇
十四編●近江聖人
十五編●河村瑞賢
十六編●甲子待
十七編●太閤秀吉
十八編●德川家康
十九編●俠黑兒 附金時計
二十編●陸奥の長者
廿一編●新太郎少將
廿二編●賴山陽
廿三編●上杉鷹山公
廿四編●菅相丞
廿五編●日蓮上人
廿六編●五少年
廿七編●二代忠孝
廿八編●平賀源內
廿九編●高山彦九郎
三十編●寧馨兒
廿一編●加藤清正
廿二編●契冲阿闍利
(以上)

(發行所 博文館)

巖谷小波君　金子紫草君共編

少年世界讀本

全部十二冊　洋裝菊判　紙數各百四十頁　每卷寫眞版數葉挿入

正價各冊金貳拾錢　全部金貳圓拾錢　郵稅各金四錢

1. 英吉利
2. 支那朝鮮暹羅及東洋諸國
3. 獨逸、墺太利
4. 西班牙葡萄牙亞弗利加各國
5. 佛蘭西、瑞西
6. 中央亞米利加各國
7. 伊太利、希臘
8. 露西亞
9. 南亞米利加
10. 和蘭白耳義丁抹瑞典諾威
11. 土耳古及東部歐羅巴
12. 北米合衆國

地理のやうに山や川の事許りを書いた本ではありません歷史のやうに昔の事許りを云ふのではありません▲現に活きて居る事即ち血眼になつて互に競爭して居る事を其競爭の樣子と其特質とを極く分り易く書いたのです▲書き方は一種特別にしてあるし本文の說明を補ふ爲には地圖もあり寫眞もある▲此本を讀めば世界各國が今日やつて居る事で分らぬ事はない▲早く言へば居ながら世界の國勢を知る事が出來ます

（發行所　博文館）

沼田笠峰君　竹貫佳水君　木村小舟君共著

少年日本地理

全部七冊　每卷洋裝菊判　紙數各百三十頁　各編銅版精密地圖挿入

1. 第一編　鄕土及關東之部
2. 第二編　中部地方之部
3. 第三編　近畿及中國之部
4. 第四編　四國九州之部
5. 第五編　奧羽及北海道之部
6. 第六編　臺灣及樺太之部
7. 第七編　朝鮮之部

正價各冊金貳拾錢　全部金貳圓參拾錢　郵稅各金四錢

世間と云ふ魔法を使つて百里も二百里も瞬く間に行つたと云ふが、今は汽車汽船の便があるからそんな魔法は知らなくても目的地へ急行する事が出來る、誠に便利な世なつたではないか。

賀張房と云ふ仙人が縮地の術を使つたと云ふのは、左樣云ふ譯では地理書も澤山出來たから少年少女の趣味あるものはまだなかつたそれが今度發行されたのである、日本國民（日本國）の地理を知らないのは恥かしいことはない。

本書は補習科の教科書に使ふ樣國定教科書に準じて書いてあるから是非共諸君の購はなければならぬ本書は少年諸君の購へとお薦めする次第である。

（發行所　博文館）

著共君草紫子金　君波小谷巖

少年世界物語

全部六册　毎卷洋裝菊判紙數各百四十頁毎册各國地圖及寫眞版挿入

第一編●世界の分割
第二編●世界の學校
第三編●世界の陸軍
第四編●世界の帝王
第五編●世界の旅行
第六編●世界の物産

正價各册金貳拾錢　全部金貳圓拾錢　郵稅一册金四錢

此少年世界物語は大きくなつて偉いものにならうとする少年が是非讀んで置かなければならぬ事を書いた本です、又た學校で教ゆる外に諸君が知りたいと思ふ事は、先づ大抵此の本の中にあります、世界の文明國では其の國の少年が世界の事を成るたけ廣く知るようにと、色々な本を備へて置きますが、惜しい哉我日本には未だ左樣いつた本はありませんから、其處で我々は此少年世界物語を出して我少年諸君に讀んで貰らうことしました、面白くて解りやすくて、其上益になるのですから一擧兩得處ではない、一擧三得四得とは此本の事です。

（發行所　博文館）

少年畫談

日本武將傳

少年世界記者　木村小舟君
幼年世界記者　武田櫻桃君　共著

（内容）

○護良親王　○藤原藤房
○名和永年　○村上義光
○畑時能　○篠塚伊賀守
○北畠顯家　○櫻田玆俊
○阿新丸　○新田侍
○足利尊氏　○北條泰時
○北條時宗　○楠正成
○兒島高德　○新田義貞
○宇都宮公綱　○小山田高家
○伊賀の局　○楠正儀
○足利義滿　○北條時賴
▽石版彩色刷口繪一葉及密畫數十個挿入

全一册菊判洋裝紙數百六十頁　正價金廿八錢　郵稅金六錢

少年史譚

世界武將傳

前田越嶺君譯

本書は世界名將の活動寫眞なり、上はアレキサンドル大王より、下はグランド將軍に至るまで世界有名の武將は皆之を收む、其性格、面影、戰術、武勳、智謀、雄略一言すれば其活動的事業及生活は躍如として全紙に溢る、此活動寫眞を見るものは如何なる少年と雖も骨鳴り肉躍り、決然志を立つるに至るべし

▽口繪寫眞版八頁挿入

全一册洋裝菊判紙數二百十二頁　正價金參拾錢　郵稅金六錢

（發行所　博文館）

博文館發行——少年

光藤泰次郎君 朝夷不二雄君 共編 ●師範學校入學準備 漢文自修讀本 全一冊菊判 二百八十八頁 正價金四拾五錢 郵稅金八錢

中野丈夫君編 ●中學高等女學校入學試驗問題集 全一冊四六判 百六十頁 正價金拾五錢 郵稅金四錢

少年世界編輯部編 ●少年百科事彙 全一冊四六判 八百四十頁 正價壹圓六拾錢 小包料金八錢

同部編 ●明治少年節用 全一冊四六判 六百頁 正價金七拾五錢 郵稅金八錢

青木輔清君編 ●廣益中字典 全一冊菊半截 八百三十頁 正價金八拾錢 郵稅金八錢

太田淳軒君著 ●新撰明治字典 全一冊袖珍 四百七十頁 正價金參拾八錢 郵稅金四錢

大月曦四郎君編 ●懷中玉編 全一冊袖珍 三百三十六頁 正價金貳拾錢 郵稅金四錢

土居香國君編述 ●作文活法 全一冊袖珍 六百二十頁 正價金六拾錢 郵稅金四錢

井上敏夫君編 ●國語漢語類語 作文錦囊 全一冊菊半截 四百三十頁 正價金參拾五錢 郵稅金六錢

（發行所　博文館）

必携重要書類

增田于信君著 ●新撰日本小歷史 全一冊菊判 二百十七頁 正價金拾五錢 郵稅金四錢

竹貫婁文君著 ●算術手引草 全一冊四六判 四百七十六頁 正價金五拾錢 郵稅金六錢

名和靖君 木村小舟君 共編 ●新式昆蟲標本製作法 全一冊四六判 三百二頁 正價金四拾錢 郵稅金六錢

木村小舟君著 ●春夏秋冬理科手引草 全一冊菊判 三百二十四頁 正價金卅八錢 郵稅金八錢

村井弦齋君著 ●給入小僧讀本 全一冊菊判 紙數七十頁 正價金拾貳錢 郵稅金四錢

木村小舟君著 ●少年諸子 全一冊四六判 三百八十四頁 正價金卅八錢 郵稅金六錢

木村小舟君著 ●少年訓 全一冊菊半截 二百四十六頁 正價金貳拾五錢 郵稅金四錢

瀨川賴太郎君編 ●教育資料子供の聲 全一冊四六判 三百八十七頁 正價金五拾五錢 郵稅金六錢

加藤忠三郎君編 ●學校家庭兒童講話資料 全一冊四六判 二百九十六頁 正價金參拾五錢 郵稅金六錢

（發行所　博文館）

理科十二ヶ月

石井研堂君著▽ 全十二冊 菊判美本

眼前の實例を骨子として平易の文章と精巧の繪畫とを筋肉となし一年十二ヶ月の中其月々に關する動植物理科等の初歩を記述せる好著なり

一編 新風船	二編 雪達摩
三編 花の錦	四編 汐干狩
五編 植物園	六編 蜻蛉祭
七編 游泳臺	八編 富士詣
九編 暴風雨	十編 銃獵者
十一編 幻燈會	十二編 歸省錄

正價 全部金壹圓 各冊金拾錢 郵稅各金貳錢

花物語

稻垣農學博士 齋田理學博士校閲 田中貢一君著

本書は小說體に記述せる理科書にして、五月に於ける金鳳華孃の講話に始まり、翌四月の春蘭伯の物語を以て終る書中、愛らしき花子、勝の兄弟と美はしき此等由花との間に縷々として演出さるゝ光景の如何に優しく將た興味深きかを見よ書中の花は悉くこれ活ける少女活ける紳士なり。花の聲は、悉くこれ天の聲なり、其内容の豐富、該博にして記事の痛快切實なる此種の書類中未だ嘗て見ざる處なり

菊判總クロース上製石版口繪十枚挿入 正價金壹圓五拾錢 小包料拾貳錢

(發行所 博文館)

388
22

57

338
22

338
22

050895−000−3

338−22

軍旗物語

松　美佐雄／著

M44
BFA−0049